

鍛冶谷・新田口遺跡Ⅸ

埋蔵文化財発掘調査報告書

2015

埼玉県戸田市教育委員会

はじめに

埼玉県の南東部に位置する戸田市は、荒川の自然に恵まれ、古くから交通の要衝として発展してきました。現在は交通の利便性から都心部のベッドタウンとして市街地化が進み、人口13万人を超える都市に成長しています。

近年、まちの景観の変化とともに社会的、文化的な環境も変わってきておりますが、古来より受け継がれてきた伝統や文化を守り、人々の絆を一層強いものとするために、文化財の保護が求められています。

今回報告いたします鍛冶谷・新田口遺跡第9次発掘調査は、共同住宅建設工事に伴い、平成27年に緊急発掘調査が行われたものです。この発掘調査により、弥生時代後期から古墳時代前期、中世、近世に生活を営んだ人たちが遺した貴重な痕跡を多数検出し、当時の人々の生活や土地利用のあり方などを知る良好な資料を確認することができました。本書が、戸田をより深く学習するための一助となることができましたら幸甚に存じます。

最後になりましたが、本事業の遂行にあたり、ご尽力、ご協力を賜りました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成27年3月

戸田市教育委員会

教育長 羽富 正晃

例 言

1. 本書は埼玉県戸田市上戸田5丁目20番3に所在する鍛冶谷・新田口遺跡第9次発掘調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は個人事業者による共同住宅建設工事に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会（担当者：岩井聖吾）が株式会社四門の支援を受けて実施した。また、整理作業、報告書作成作業は、戸田市教育委員会が株式会社四門の支援を受けて実施した。
3. 発掘調査は、平成27年1月6日から平成27年1月29日まで行い、整理作業・報告書作成作業は平成27年1月30日から平成27年3月25日まで株式会社四門文化財事業部で実施した。
4. 発掘調査から報告書作成までの事業費は、全て事業者の負担による。
5. 本書は、埼玉県戸田市教育委員会が刊行した。
6. 本書は、岩井聖吾が監修した。編集は向井互（株式会社四門）が行った。執筆は第1章第2節、第2章第4節、第3章は向井互が、その他の部分は岩井聖吾が行った。
7. 発掘現場の写真は向井互、阿部孝行が行い、出土遺物の写真は岩尾和彦が行った。
8. 本書の著作権は、戸田市教育委員会が保有する。
9. 出土遺物及び発掘調査に伴う各種データ等はすべて戸田市教育委員会が保管し、活用を図るものとする。
10. 調査及び本書を作成するにあたり、次の方々・機関にご指導、ご協力を賜った。

小島清一 長澤有史 吉田幸一 若松良一 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課 戸田市立郷土博物館（敬称略 五十音順）

11. 本事業は以下の組織により実施した。

【埼玉県戸田市教育委員会】

教 育 長 羽富 正晃
教 育 部 長 山本 義幸
次 長 小沼 利行
生涯学習課長 頓所 博行
生涯学習課主幹 津田 孝一
生涯学習課主事 池上 裕康
生涯学習課主事 岩井 聖吾（調査担当者）

【株式会社四門 文化財事業部】

主 幹 中條 英樹
主任調査員 向井 互
調 査 員 阿部 孝行
整理調査員 鈴木 裕子
調査補助員 沖野 紘典 小口 友平 布施 昂則
発掘調査参加者及び資料整理参加者

石井夏樹 家永 隆 榎本 昇 大熊福太郎 金城真理子 佐藤浩一 富山絵里子 中信節子
布村普司 原 孝子 平山 守 藤田真紀 前澤由香 守屋昌利 山口 智

凡 例

1. 挿図中の地図、検出遺構実測図等の方位は、図中に真北の方位を示した。
2. 本書の国家座標、緯度、経度は世界測地系に則している。
3. 遺構番号は調査の進捗過程で、そのプランの確認された順に遺構の種別ごとに付したが、整理・報告書作成作業の過程で遺構番号を振り直している。

なお、遺構略号は下記のとおりである。

SX：周溝状遺構 SD：溝跡 SE：井戸跡 SK：土坑 P：ピット

4. 発掘調査時の土層観察における色調の記録、及び遺物観察における色調は、『新版 標準土色帖』2013年度版（小山正忠・竹原秀雄 編・著者、農林水産省農林水産技術会議事務所 監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修、日本色研事業株式会社 発行）を参考にした。
5. 土層観察表では、層位、主体土、締まり、粘性、混入物を記載した。その際、各属性に関する度合いを以下のように表した。

多量：35%以上～50%未満

中量：15%以上～35%未満

少量：5%以上～15%未満

微量：5%未満

混入物の大きさ

粒：粒径20mm未満

ブロック：粒径20mm以上

6. 遺物拓影図は、断面図に向かって左側に内面を、右側に外面を示した。ただし、外面のみの場合には、向かって左側に外面を示した。また、底面は下に、天井面は上に示した。
7. 遺物の種別のうち、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭に属する土器は、すべて「土師器」と表記した。
8. 個別遺構図中の線種、線号及び各種図中における網掛け部分の使用例は以下のとおりである。

遺構上端 ——— (0.5pt)

遺構中端 ——— (0.35pt)

遺構下端 ——— (0.25pt)

攪乱 - - - - -

想定線 - - - - -

調査区 ———

地山（自然堆積層）

9. 遺物観察表の法量の（ ）の値は残存部からの推定値を示す。[]は残存最大値を示す。
10. 遺物実測図及び遺構実測図の縮尺はすべて挿図中に示した。
11. 近世陶磁器の観察表における材質・器種・器形の分類、推定製作地、推定製作年代等の表記については、主に新宿区内藤町遺跡調査会ほか『内藤町遺跡』第Ⅱ分冊（1992）を参照した。
12. 標高は、T. P.（東京湾中等潮位）を基準とした。
13. ピットの計測表は遺構実測図中に示した。
14. 出土遺物の註記は、下記の原則に基づき行った。

例：KS. 9. SX - 01. 25

遺跡略号 調査次 遺構種別 遺構番号 遺物番号

15. 写真図版中の遺物写真の縮尺は基本的に2分の1とした。ただし、大型遺物については縮尺を3分の1または4分の1とした。

目 次

はじめに

例言／凡例

目次／挿図目次／挿表目次／図版目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査と整理作業の経過	
1 発掘調査	2
2 整理作業	2

第2章 周辺環境と遺跡・調査の概要

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	7
第3節 遺跡・調査の概要	8
第4節 基本層序	12

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の遺構と遺物

1 周溝状遺構	13
2 溝跡	20
3 土坑	20
4 ビット	21

第2節 中世の遺構と遺物

1 溝跡	22
2 井戸跡	22
3 土坑	28

第3節 近世以降の遺構と遺物

1 溝跡	32
2 井戸跡	41
3 土坑	43
4 ビット	45

第4節 時期不明遺構と遺構外出土遺物

1 溝跡	46
2 土坑	46
3 ビット	47
4 遺構外出土遺物	49

第5節 第2号周溝状遺構直下に確認された砂層

1 砂層	51
------	----

第4章 まとめ

1 弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭	53
2 中世	54
3 近世以降	55
結語	55

引用・参考文献

巻末図版

報告書抄録／奥付

挿図目次

第1図 戸田市域の地形	4	第25図 第4・5号溝跡実測図 (SD04・SD05)	33
第2図 鍛冶谷・新田工遺跡及び周辺の遺跡位置図	5	第26図 第4号溝跡出土遺物実測図 (SD04)	33
第3図 鍛冶谷・新田工遺跡調査区位置図	6	第27図 第5号溝跡出土遺物実測図 (SD05)	35
第4図 調査区全体図	10	第28図 第6号溝跡実測図 (SD06)	37
第5図 調査区等高線図	11	第29図 第6号溝跡出土遺物実測図 (SD06)	38
第6図 基本土層図	12	第30図 第7・9号溝跡実測図 (SD07・SD09)	40
第7図 第1号周溝状遺構実測図 (SX01)	13	第31図 第3号井戸跡実測図 (SE03)	41
第8図 第2・3号周溝状遺構実測図 (SX02・SX03)	14	第32図 第6号井戸跡実測図 (SE06)	42
第9図 第2号周溝状遺構出土遺物実測図 (SX02)	15	第33図 第6号井戸跡出土遺物実測図 (SE06)	42
第10図 第4号周溝状遺構実測図 (SX04)	18	第34図 第3・5・6号土坑実測図 (SK03・SK05・SK06)	44
第11図 第4号周溝状遺構出土遺物実測図 (SX04)	18	第35図 第16・23号ピット実測図 (P16・P23)	45
第12図 第5号周溝状遺構実測図 (SX05)	19	第36図 第23号ピット出土遺物実測図 (P23)	45
第13図 第1号溝跡実測図 (SD01)	20	第37図 第8号溝跡実測図 (SD08)	46
第14図 第1号溝跡出土遺物実測図 (SD01)	20	第38図 第2・4号土坑実測図 (SK02・SK04)	46
第15図 第1号土坑実測図 (SK01)	21	第39図 時期不明ピット実測図 (1)	47
第16図 第1・2・3・8号ピット実測図 (P01・P02・ P03・P08)	21	第40図 時期不明ピット実測図 (2)	48
第17図 第3号溝跡、第1・2号井戸跡実測図 (SD03・ SE01・SE02)	23	第41図 時期不明ピット実測図 (3)	49
第18図 第3号溝跡出土遺物実測図 (SD03)	24	第42図 遺構外出土遺物実測図	50
第19図 第2号井戸跡出土遺物実測図 (SE02)	25	第43図 第2号周溝状遺構直下の砂層の堆積状況と その分布図	51
第20図 第4号井戸跡実測図 (SE04)	26		
第21図 第5号井戸跡実測図 (SE05)	27		
第22図 第7号土坑実測図 (SK07)	29		
第23図 第7号土坑出土遺物実測図 (SK07) (1)	30		
第24図 第7号土坑出土遺物実測図 (SK07) (2)	31		

挿表目次

第1表	観谷・新田口遺跡周辺遺跡の概要	5	第8表	第4号溝跡出土遺物観察表	33
第2表	第2号周溝状遺構出土遺物観察表	16	第9表	第5号溝跡出土遺物観察表	36
第3表	第4号周溝状遺構出土遺物観察表	18	第10表	第6号溝跡出土遺物観察表	39
第4表	第1号溝跡出土遺物観察表	20	第11表	第6号井戸跡出土遺物観察表	43
第5表	第3号溝跡出土遺物観察表	24	第12表	第23号ピット出土遺物観察表	45
第6表	第2号井戸跡出土遺物観察表	26	第13表	遺構外出土遺物観察表	50
第7表	第7号土坑出土遺物観察表	32			

図版目次

図版1

- 1 調査区遠景（南西から）
- 2 第1号周溝状遺構完掘（北東から）
- 3 第2・3号周溝状遺構完掘（南西から）
- 4 第2号周溝状遺構A-A'断面（北東から）
- 5 第2号周溝状遺構遺物出土状況（北西から）
- 6 第3号周溝状遺構B-B'断面（東から）
- 7 第5号周溝状遺構完掘（北東から）
- 8 第5号周溝状遺構断面（北東から）

図版2

- 1 第4号周溝状遺構完掘（南西から）
- 2 第1号溝跡完掘（南東から）
- 3 第1号土坑完掘（南西から）
- 4 第8号ピット完掘（西から）
- 5 第3号溝跡完掘・第2号井戸跡調査終了状況（西から）
- 6 第3号溝跡完掘・第1号井戸跡調査終了状況（東から）

図版3

- 1 第2号井戸跡・第7号土坑断面（北東から）
- 2 第5号井戸跡調査終了状況（北西から）
- 3 第5号溝跡完掘（南西から）
- 4 第4・5号溝跡A-A'断面（北東から）
- 5 第4号溝跡A-A'断面（北東から）
- 6 第4号溝跡遺物出土状況（南から）
- 7 第5号溝跡8層遺物出土状況（北東から）
- 8 第7号溝跡完掘（東から）

図版4

- 1 第6号井戸跡調査終了状況（北西から）
- 2 第6号井戸跡遺物出土状況（北東から）
- 3 第15号ピット完掘（北から）
- 4 第17号ピット完掘（北から）
- 5 第2号周溝状遺構直下A-A'断面（北東から）

図版5

- 出土遺物写真（1）
- 第2号周溝状遺構
 - 第4号周溝状遺構
 - 第1号溝跡

図版6

- 出土遺物写真（2）
- 第3号溝跡
 - 第2号井戸跡

図版7

- 出土遺物写真（3）
- 第7号土坑

図版8

- 出土遺物写真（4）
- 第5号溝跡

図版9

- 出土遺物写真（5）
- 第6号溝跡（1）

図版10

- 出土遺物写真（6）
- 第6号溝跡（2）
 - 第4号溝跡
 - 第6号井戸跡

図版11

- 出土遺物写真（7）
- 第23号ピット
 - 遺構外

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成26年7月28日、個人事業者から（以下「事業者」という）から戸田市教育委員会（以下「市教育委員会」という）に対し、戸田市上戸田5丁目20番3における694.89㎡の共同住宅建設事業計画と埋蔵文化財の取扱いについて相談があった。

市教育委員会では、事業計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地内（鍛冶谷・新田口遺跡）に所在しており、開発工事中に埋蔵文化財が発見される可能性が高いため、事業者に対し工事着手前に試掘確認調査を実施するよう指導した。

これを受け、平成26年8月26日に事業者から市教育委員会に対し試掘確認調査の依頼書が提出され、試掘確認調査を実施することとなった。

試掘確認調査は、市教育委員会が平成26年10月29日に実施し、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の周溝状遺構、中世の井戸跡、その他帰属時期不明の溝状遺構、土坑、ピットとこれに伴う土師器、陶器を確認した。

この調査結果に基づき、事業者、市教育委員会間で埋蔵文化財の保存について協議をもち、地中梁や基礎杭埋設工事等で埋蔵文化財の破壊を免れない部分（142.50㎡）については記録保存のための緊急発掘調査、他の部分（552.39㎡）については保護層を確保することにより埋蔵文化財の現状保存を実施することで合意した。

平成26年12月1日、事業者から文化財保護法第93条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出され、平成26年12月18日付戸教生第1101号にて埼玉県教育委員会（以下「県教育委員会」という）あてに到達した。また、市教育委員会は埼玉県埋蔵文化財事務処理要綱に基づき、県選定重要遺跡 鍛冶谷・新田口遺跡の取り扱いについて、平成26年12月17日付戸教生第1082号にて県教育委員会あてに協議書を提出した。

文化財保護法第93条の届出を受けて、県教育委員会から事業者に対し、平成27年2月13日付教生文第4-1502号で、申請地内における工事着手前に発掘調査を実施するよう指示があった。また、県選定重要遺跡の取り扱いについては、平成26年12月26日付教生文第1957号で記録保存のための発掘調査の措置をとることがやむを得ないことである旨、県教育委員会から市教育委員会へ回答があった。

発掘調査の実施にあたり、事業者は市教育委員会に対し、平成26年12月17日付で発掘調査の依頼書を提出した。また、同日付戸教生第1081号にて2者による「共同住宅建設事業予定地にかかる埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」を締結した。

そして、文化財保護法第99条の規定に基づき、市教育委員会から県教育委員会あてに平成26年12月18日付戸教生第1083号にて埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、鍛冶谷・新田口遺跡第9次発掘調査を実施することとなった。

第2節 発掘調査と整理事業の経過

1 発掘調査

鍛冶谷・新田口遺跡第9次調査は、平成27年1月6日から同年1月29日まで実施した。調査面積は142.50㎡である。1月5日に機材搬入及び環境整備、調査範囲の確定を行い、1月6日から7日まで、表土掘削により遺構確認面の把握を行った。作業は重機によって遺構確認面まで表土を掘削した後、人力にて遺構確認を実施した。表土掘削時に生じた排出土は調査区間や調査区の北東側に土山を築き仮置きした。同時に調査区周辺には測量用の国家座標に基づく基準杭を打設し、これを基準として4m四方のグリッドを設定した。表土掘削及び遺構確認は1区より開始し、2区、3区と実施した。1月7日には遺構確認が終了し、1月8日より遺構掘削を開始した。

遺構の掘削は人力により行い、随時遺物採取、遺構や遺物出土位置の測量と記録、写真撮影を行った。遺物の採取は、基本的に遺構単位で一括して行ったが、必要に応じて出土状況の写真撮影や遺物番号付与と出土位置の記録を行った。遺構測量のうち、平面図についてはトータルステーション及び電子平板を使用し、断面図については手作業による記録化を行った。また、併せて写真撮影による記録を行った。

1月26日、2区第2号周溝状遺構の直下に砂層（自然堆積）の堆積を確認した。1月27日から28日まで、この砂層の堆積状況と平面的な広がり記録し、各砂層からサンプルを採取した。1月27日には遺構・遺物に関する記録作業が終了し、各調査区における全景写真と調査区遠景写真を撮影した。また、併せて調査区内でのレベリングを実施した。1月29日、全ての記録作業が完了した時点で、仮置きしていた排出土の埋め戻しを実施し、同日には機材等の搬出を終え発掘調査を終了した。

2 整理事業

当該調査にかかる出土遺物及び図面の整理事業、報告書作成作業は平成27年1月30日から同年3月25日まで実施した。このうち、遺物の洗浄作業については発掘調査と並行して作業を行い、同年1月29日に終了した。

整理事業の経過は以下の通りである。

出土遺物の註記作業	：2月5日～2月6日
出土遺物の分類と計量	：2月3日～2月6日
掲載遺物の抽出作業	：2月12日
出土遺物の写真撮影	：2月16日～2月18日
出土遺物の実測及び採拓作業	：2月16日～2月24日
出土遺物のトレース作業	：2月18日～2月27日
遺構第一原図の整理・トレース作業	：2月2日～2月20日
写真整理	：2月2日～2月5日
報告書作成	：2月16日～3月25日

遺構平面図の作成は、トータルステーション及び電子平板による測量データに基づき、Adobe Illustrator を用いてデジタルトレースを行った。遺構断面図及び遺物実測図、拓影図はスキャナにてコンピュータに取り込み、図面データについては Adobe Illustrator を用いてデジタルトレースを行った。また、近世陶磁器の文様は写真撮影を行い、Adobe Photoshop を用いて画像加工を実施し、トレースデータと合成した。すべてのデータが完成した後、Adobe Illustrator 及び Adobe InDesign により版下を作成し、INDD 形式ファイルにて入稿した。

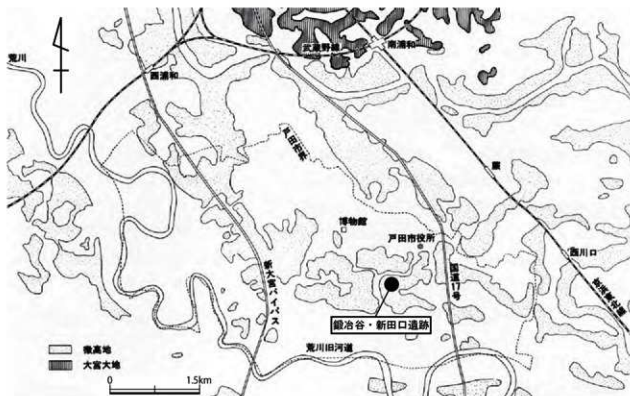
第2章 周辺環境と遺跡・調査の概要

第1節 地理的環境

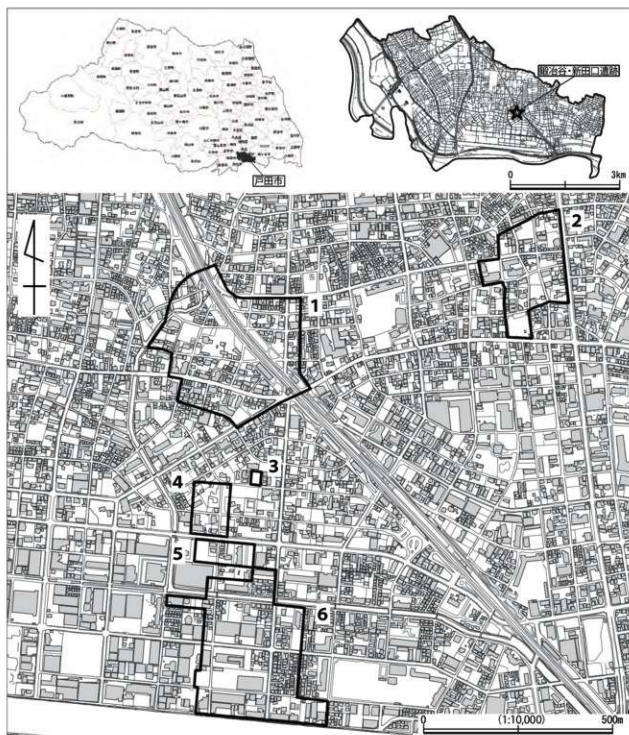
鍛冶谷・新田口遺跡が所在する戸田市は、埼玉県最南端部に位置し、東西約6.0km、南北約3.0km、面積18.17km²の東西に細長い形状を呈する。北はさいたま市、東は蕨市と川口市にそれぞれ地続きで接し、西の朝霞市と和光市、南の東京都板橋区と北区には荒川を隔てて接している。市域には国道17号線(中山道)や新大宮バイパスが南北に走り、また首都高速5号線や東京外郭環状道路、JR埼京線の開通により、交通の利便性が高まり急激な市街地化が進んでいる。また、都心に近い立地のため、工場や流通センターなども数多く所在する。

戸田市の地形は、埼玉県西部の山地に端を発する荒川によって形成された平坦な沖積低地(荒川低地)が全域を占める。荒川は氾濫や流路の変更によって、市域の中央部を西から東にかけて自然堤防を形成している。この自然堤防は荒川旧河道に沿うように発達し、戸田市域では美女木から笹目を通り、本町、上戸田を抜けて川口市へと断続的に延びている。

鍛冶谷・新田口遺跡はJR埼京線戸田駅と戸田公園駅の間中部、上戸田3・5丁目、本町3丁目、大字新曾を中心に広がる遺跡である。遺跡は、西は上戸田川によって分断され、東は緩やかな谷が入り組む「C字」状の微高地上に立地する。遺跡が広がる範囲の標高は、自然堤防上の最も高い地点で約3.9m、東側谷部の最も低い地点で約2.7mを測る。この比高差は1.2m程度であるため、周辺では土地の起伏を感じさせないほど平坦な地形が広がっている。



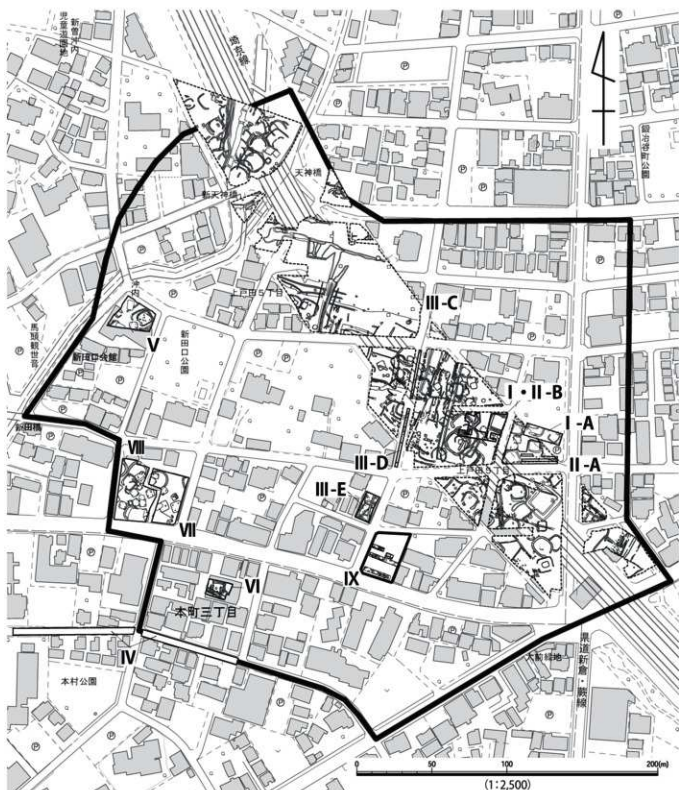
第1図 戸田市域の地形



第2図 鍛冶谷・新田口遺跡及び周辺の遺跡位置図

第1表 鍛冶谷・新田口遺跡周辺遺跡の概要

No.	遺跡名	所在地	種別	時代	立地
1	鍛冶谷・新田口遺跡	戸田市上戸田3・5丁目、本町3丁目、大字新倉	集落跡	弥生後期・古墳前期	自然堤防
2	前谷遺跡	戸田市上戸田2丁目	集落跡・城跡	弥生後期・古墳前期・平安・鎌倉・南北朝・室町	自然堤防
3	大前遺跡	戸田市本町3丁目	集落跡	古墳前期・平安・南北朝・室町	自然堤防
4	上戸田本村遺跡	戸田市本町3丁目	集落跡・円墳	古墳前期	自然堤防
5	南町遺跡	戸田市南町	集落跡	古墳前期	自然堤防
6	南原遺跡	戸田市南町	集落跡・円墳	弥生後期・古墳前/後期・奈良・平安・鎌倉	自然堤防



- | | | | |
|-----------------|--------------------------------|------------------|---|
| I 第1次調査(1967) | : 戸田市教育委員会調査 (塩野 1968・塩野 1969) | VI 第6次調査(1992) | : 戸田市遺跡調査会調査 (小島 1994) |
| II 第2次調査(1968) | : 戸田市教育委員会調査 (塩野 1969) | VII 第7次調査(1997) | : 戸田市遺跡調査会調査 (小島 2005) |
| III 第3次調査(1982) | : 戸田市教育委員会調査 (伊藤 1984) | VIII 第8次調査(1999) | : 戸田市遺跡調査会調査 (小島 2005) |
| IV 第4次調査(1983) | : 戸田市教育委員会調査 (未報告) | IX 第9次調査(2015) | : 戸田市教育委員会調査 (本報告) |
| V 第5次調査(1989) | : 戸田市遺跡調査会調査 (小島 1990) | | |
| | | | 〔 〕 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査(1982~1985)
(西口ほか 1986) |

第3図 鍛冶谷・新田口遺跡調査区位置図

第2節 歴史的環境

戸田市では旧石器時代の遺構・遺物は確認されておらず、過去の生活の痕跡が見え始めるのは縄文時代からである。現在、縄文時代に帰属する遺跡は確認されていないが、縄文時代前期後葉から後期中葉までの土器片が確認されている。縄文時代前期では、堤外から前期後葉諸磯a式の破片資料1点が出土しており、本町からは前期末十三菩提式深鉢形土器の大型破片1点が出土した。縄文時代中期では、中葉から後葉にかけての遺物が出土した。鍛冶谷・新田口遺跡では勝飯式や加曾利E式の破片資料の出土が報告されており、南原遺跡などでも阿玉台式や加曾利E式期の土器片が微量ながら検出されている。縄文時代後期は、前葉から中葉にかけての遺物が検出されている。鍛冶谷・新田口遺跡では堀之内式、加曾利B式の土器片が出土しており、堤外からも同型式期に帰属する土器破片が出土した。

縄文時代後期後葉から弥生時代中期にかけての遺構・遺物は確認されていないが、弥生時代後期から古墳時代前期になると、戸田市域の自然堤防上に多くの遺跡が形成されるようになる。弥生時代後期から古墳時代前期では、前谷遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、南町遺跡、南原遺跡、上戸田本村遺跡、根本橋遺跡で遺構・遺物が検出されている。この中でも鍛冶谷・新田口遺跡は、当該期の方形周溝墓（周溝状遺構）群や集落跡、木器の出土などから全国的に有名である。上戸田本村遺跡では、2・3次調査において環濠と思われる溝状遺構と、溝の東部に密集する竪穴住居群を検出しているため、遺跡周辺に当該期の環濠集落が存在した可能性が高い。

古墳時代中期の遺構・遺物が検出された遺跡は少なく、南原遺跡2次調査B区で竪穴住居3軒、9次調査で井戸跡1基、10次調査で竪穴住居1軒と土坑2基が確認されたのみである。

古墳時代後期は、上戸田本村遺跡や南原遺跡周辺で群集墳が形成される時期である。上戸田本村遺跡内にはかつて「くまん塚」と呼ばれた古墳が所在した。「くまん塚」は円墳で、墳丘の盛土が僅かに残存していたとされ、そこから横穴式石室の石材の一部と直刀2振が出土したと言われている。また、上戸田本村遺跡では1次調査において鬼高式期の住居跡2軒、4次調査において馬形埴輪や人物埴輪、円筒埴輪が出土した古墳周溝が1基検出され、南原遺跡では2次調査A区で円形周溝墓（円墳）1基、3次調査D区で鬼高式期の住居跡1軒と屋外竈1基、4次調査で円形周溝墓（円墳）2基、6次調査で円形周溝墓（円墳）1基、8・9次調査で馬形埴輪、人物埴輪、家形埴輪、円筒埴輪等が出土した古墳周溝1基と埴輪を有さない古墳周溝1基が検出されている。

平安時代では、南原遺跡や鍛冶谷・新田口遺跡、前谷遺跡で竪穴住居や掘立柱建物跡、井戸跡、土坑群、ピット列等が検出されている。前谷遺跡では2・4次調査において瓦塔片が出土しており、9世紀頃に調査区周辺に仏堂施設を有する集落が存在していた可能性が指摘されている。

中世は、市の西部からさいたま市の南西部の地域がかつての佐々目郷（篠目・笹目）に該当し、鎌倉鶴岡八幡宮の社領であったことが文献史料からわかっている。当該期では、大前遺跡や前谷遺跡、上戸田本村遺跡、南原遺跡、南町遺跡、美女人八幡社協遺跡で掘立柱建物跡や溝状遺構、井戸跡が検出されている。前谷遺跡や南原遺跡、上戸田本村遺跡からは断面が葉研形の溝状遺構が検出されていることから、『新編武蔵国風土記稿』の桃井氏の居城であったとされる「戸田の御所」や渋川氏の居

城であったとされる「蔵城」との関連が指摘されるが、未だその明確な位置や検出された遺構との関係性については明らかになっていない。

近世は、戸田市域の大半の村々が幕府の直轄領であり、徳川家の鷹場として使用されていたことがわかっている。また、江戸五街道の一つである中山道の整備に伴い、荒川を渡るための「戸田の渡し」が板橋宿と蔵宿を結ぶ交通の要衝として機能していたことが文献史料からわかっている。

第3節 遺跡・調査の概要

鍛冶谷・新田口遺跡の名称は、この地域がかつて「鍛冶谷（屋）」、「新田口」と呼ばれていた二つの地域に所在していたことに由来する。この遺跡は、昭和42年に戸田市で最初の発掘調査が行われた遺跡であり、昭和51年には弥生時代から古墳時代に低地に形成された稀有な集落遺跡として、埼玉県選定重要遺跡に選定されている。また、昭和57年から昭和60年には東北・上越新幹線及び埼京線敷設に伴う大規模な発掘調査が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団」という）によって行われ、弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓（周溝状遺構）群や竪穴住居群、またこれに伴う大量の遺物の検出により、当該期の大規模な低地式集落の発掘調査事例として注目を集めた。

鍛冶谷・新田口遺跡は、本調査を含めてこれまでに10回に渡る発掘調査が行われている。戸田市教育委員会調査が5回、戸田市遺跡調査会調査が4回、事業団調査が1回である。なお、下記の「周溝状遺構」は報告書中では全て「方形周溝墓」と記載されているが、表記を統一するために「周溝状遺構」の語を使用していることを付記しておく。

第1次調査は、鯉のぼりのポールを建てる際に偶然土器の破片が発見されたことをきっかけとし、戸田市教育委員会が学術調査として昭和42年8月6日から12日までの期間で実施した。発掘調査はA・B区の2地点において行われ、A区では弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構3基、B区では同時期の周溝状遺構2基と竪穴住居1軒が検出された。周溝状遺構から出土した土器は遺存状態が良好であり、S字口縁を有する甕形土器をはじめとする東海地方系の土器も出土した。また、竪穴住居の貯蔵穴からは甕セットが略完形で出土した。

第2次調査は、第1次調査の継続調査として戸田市教育委員会が昭和43年7月26日から8月2日までの期間で実施した。第2次調査A区は第1次調査A区の南側に設定され、ここから弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構2基が検出された。また、第2次調査B区は第1次調査B区を東西へ拡張するように設定され、第1次調査で既に検出されていたものを含め計7基の周溝状遺構が検出された。

事業団の調査は、東北・上越新幹線、埼京線敷設工事に伴う緊急発掘調査として、昭和57年4月から昭和60年3月までの約3年間に渡って実施された。なお、市教育委員会による第1次・第2次調査区は、この調査で再調査が行われている。調査で検出された遺構は、竪穴住居37軒、周溝状遺構95基、井戸跡82基、土坑166基、溝状遺構232条である。竪穴住居、周溝状遺構は全て弥生時代後期から古墳時代前期に帰属するものであり、当該期の集落の大部分が発掘された重要な調査事例となっている。

第3次調査は、下水道整備工事に伴う緊急発掘調査としてC・D区が、個人住宅建設に伴う緊急発掘調査としてE区が調査された。発掘調査は戸田市教育委員会が主体となり、昭和57年10月5日から30日までの期間で実施された。C区からは溝状遺構5条、D区からは溝状遺構4条と土坑7基が検出された。これらのうち、C区の溝状遺構2条は事業団による調査によって、同一の周溝状遺構に帰属するものであることが判明している。また、D区の溝状遺構2条についても、それぞれが周溝状遺構の一部であったことが判明している。E区からは周溝状遺構3基と溝状遺構4条が検出された。特に第2号周溝状遺構からは、良好な遺存状態で弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土した。

第4次調査は昭和58年に市教育委員会が実施したが、調査内容については不明である。

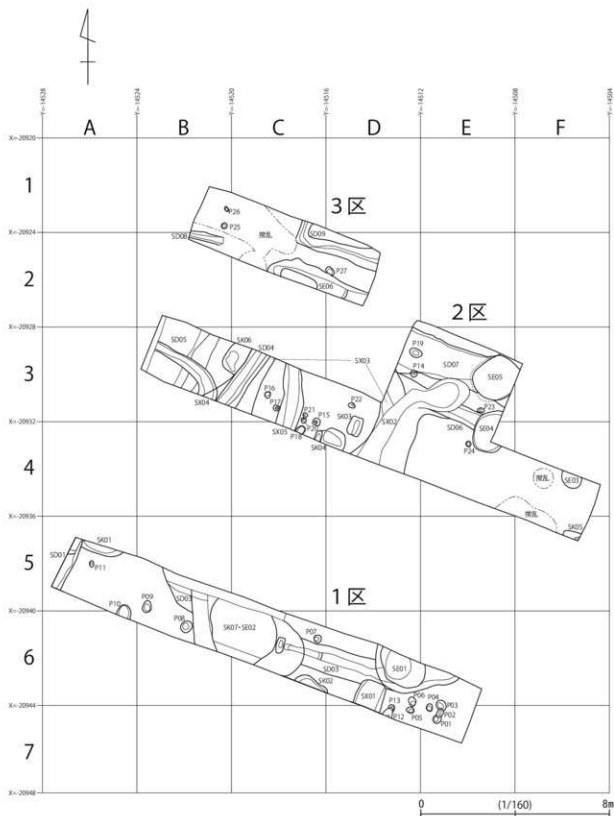
第5次調査は、事務所建設に伴う緊急発掘調査として戸田市遺跡調査会が平成元年2月1日から2月23日までの期間で実施した。調査区からは弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構2基、竪穴住居2軒、土坑1基、溝状遺構7条が検出された。周溝状遺構は1辺を重複して入れ子状に検出され、周溝の内側に環状に巡るピット列と方形に並ぶ4基のピットが確認された。周溝状遺構が「周溝を有する建物跡」であった可能性を示唆する調査事例である。検出された竪穴住居はいずれも焼失住居であり、炭化材等が多く検出された。

第6次調査は、寄宿舎建設に伴う緊急発掘調査として戸田市遺跡調査会が平成4年1月16日から2月26日までの期間で実施した。調査区からは弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構1基、溝状遺構1条、土坑1基、近世（18世紀～19世紀）の土坑1基、堀跡1基が検出された。周溝状遺構は、段及び溝中土坑と思われる掘り込みを有するものである。

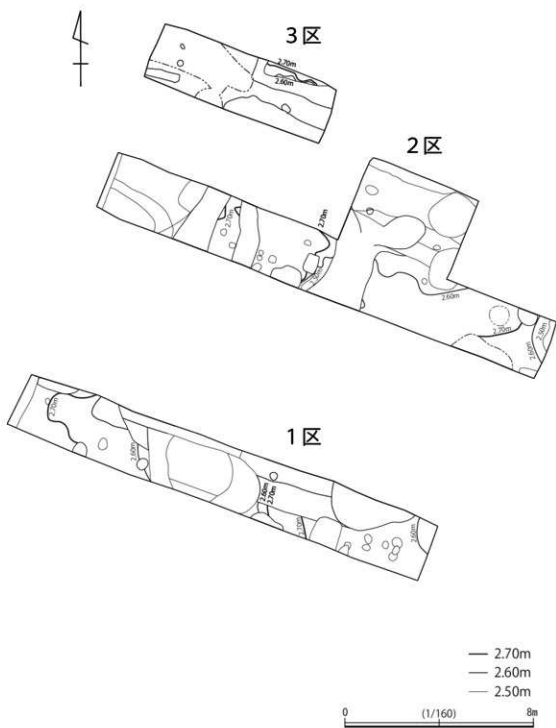
第7次調査は、共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として戸田市遺跡調査会が平成9年9月20日から11月27日までの期間で実施した。調査区からは弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居6軒、周溝状遺構2基、土坑4基が検出された。竪穴住居は、計6軒のうち5軒から多量の炭化物が検出されており、焼失住居であった可能性が指摘されている。周溝状遺構は、第1号周溝状遺構が略円形を呈しており、溝中土坑からは良好な遺存状態で土器が出土した。また、第2号周溝状遺構は覆土中層に多量の炭化物が混入している箇所が見られ、周辺から良好な遺存状態で土器が出土した。第3号土坑・第4号土坑からは比較的少量の土器が出土しており、小型の埴形土器やS字口縁甕形土器、頸部に凸帯を有する壺形土器が出土した。

第8次調査は、共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として戸田市遺跡調査会が平成11年7月21日から9月21日までの期間で実施した。調査区からは弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居12軒、周溝状遺構7基が検出された。第1・2・3・7号周溝状遺構では、覆土中に焼土や炭化物の分布が確認された。また、第3号周溝状遺構からは頸部に凸帯を有する壺形土器が出土した。

本調査は、事業団調査を除くと第9次目の発掘調査となる。調査区からは弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構5基、溝跡1条、土坑1基、ピット4基、中世の溝跡1条、井戸跡4基、土坑1基、近世の溝跡5条、井戸跡2基、土坑3基、ピット2基、時期不明の溝跡1条、土坑2基、ピット21基を検出した。また、これらの遺構に伴い、土師器、中世陶器、中国陶磁器、近世陶磁器、石製品、金属製品、漆器を含む木製品、生産関連遺物が出土した。



第4図 調査区全体図

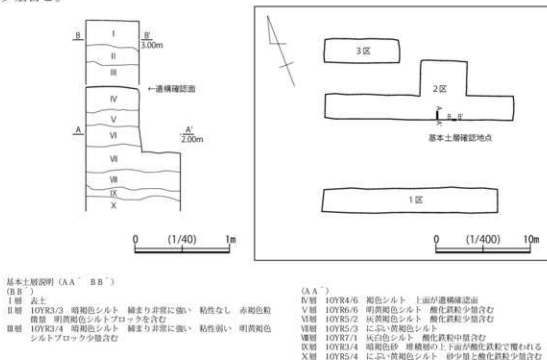


第5図 調査区等高線図

第4節 基本層序

本調査区の基本層序は、2区D-4グリッドで観察した。地表面の標高は概ね3.4mである。表土掘削後の遺構確認面は大部分が第IV層上面である。遺構検出面の標高は、南西部の1区においては北西側（標高2.70～2.71m）から南東側（標高2.65～2.68m）へ向かって下り、中央部の2区においても北西側（標高2.75～2.81m）から南東側（標高2.71～2.72m）へ向かって下る。3区の北東部では2.70m前後となる。3区については遺構確認面（IV層上面）の大部分が攪乱を受けていて、標高の変化を捉えることが困難であったが、調査区内の遺構確認面は概ね北西から南東へ向かって低くなると思われる（第5図）。

I層は表土であり、旧建物解体時に攪乱を受けた層である。煉瓦やコンクリートガラを含む。II層は暗褐色シルト層で、締まりは非常に強く、粘性はない。粒径1～2mmの赤褐色粒子を微量含む。このほか、II層からは明黄褐色シルトブロックと幕末～近代期の瓦や陶磁器類、ガラス製品が出土したため、近代以降に帰属する層であると考えられる。III層は暗褐色シルト層で、締まりは非常に強く、粘性は弱い。このほか、IV層を構成する明黄褐色シルトブロックを少量含む。弥生時代から近世までの遺物を包含する遺物包含層である。IV層は、褐色シルトからなる氾濫土特有の粒子の細かい粘質シルト層であり、自然堤防表層の河川性堆積土層であると考えられる。この層の上面が遺構確認面である。IV層以下は、河川の氾濫により繰り返して堆積した自然堤防を形成する河川性堆積土層である。V層は明黄褐色シルト層で、酸化鉄粒を少量含む。VI層は灰黄褐色シルト層で、酸化鉄粒を少量含む。VII層はぶい黄褐色シルト層である。VIII層は灰白色シルト層で、酸化鉄粒を中量含む。IX層は暗褐色砂層で、堆積層の上下面が酸化鉄粒で覆われる。X層はぶい黄褐色シルト層で、砂を少量と酸化鉄粒を少量含む。



第6図 基本土層図

第3章 検出された遺構と遺物

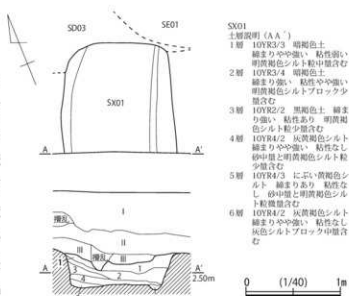
第1節 弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の遺構と遺物

1 周溝状遺構

第1号周溝状遺構—SX01

遺構（第7図 図版1-2）

位置：1区D-6・7グリッド。重複関係：第3号溝跡に切られる。平面形・規模：南西—北東方向に長軸を持つ周溝状遺構であると考えられる。南西方向は調査区外へと続き、北東側は第3号溝跡に切られるが、断面形の特徴と覆土の堆積状況が第2号周溝状遺構や第4号周溝状遺構と類似することから、周溝状遺構と判断した。調査区内では長さ1.15m、幅1.20m、遺構確認面の標高2.68mを測る。主軸方位：N-24°-Eを測る。周溝：断面形は逆台形を呈する。上端幅1.12



第7図 第1号周溝状遺構実測図 (SX01)

～1.20m、下端幅0.74～0.95m、遺構確認面からの深さは0.36mを測る。底面の標高は2.22～2.38mで南西から北東へ向かって下る。底面は概ね平坦で、東壁面際に幅0.12m、深さ0.05mの溝状の掘り込みを有する。両壁面は急な傾きで外傾して立ち上がる。覆土：6層に区分できる。1～3層は西側からの土砂の流れ込みによる自然堆積層と考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは全部で2点（15.1g）の遺物が出土した。全て弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器であるが、小破片のため図示できなかった。

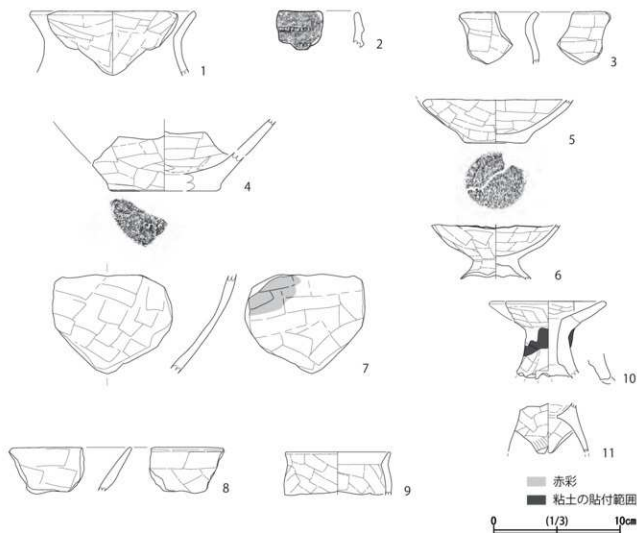
時期

出土遺物から、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭。

第2号周溝状遺構—SX02

遺構（第8図 図版1-3～5）

位置：2区D・E-3・4グリッド。重複関係：第3号周溝状遺構を切り、第6号溝跡、第7号溝跡に切られる。平面形・規模：南側が調査区外に続くが、主軸を南西—北東方向とする円形に近い隅丸方形を呈する周溝状遺構の北西辺の一部であると推定される。北西辺の周溝は北側において北東方向に屈曲し、2.0m前後延びた後に立ち上がる。調査区内では長さ4.50m、幅3.10m、遺構確認面の標高2.80mを測る。本遺構の北西辺の外縁辺部は、本遺構に切られる第3号周溝状遺構の南東辺の内側縁辺と一致する。主軸方位：N-24°-Eを測る。周溝：周溝は北東辺で立ち上がる。断面形は東



第9図 第2号周溝状遺構出土遺物実測図 (SX02)

側壁面が段状となる逆台形を呈し、上端幅 2.46m、下端幅 0.48～0.99m、遺構確認面からの深さは 0.85m を測る。底面の標高は 1.78～2.01m と北から南へ向かって下る。底面は平坦で、西側壁面の立ち上がりは急であり、東側壁面は緩やかに立ち上がり 2 段の階段状を呈する。覆土：13 層に区分できる。底面直上の 12 層は褐色シルト層であり、周溝内側の周堤が崩落したことによる堆積層の可能性はある。

遺物 (第9図 第2表 図版5-1～11)

出土状況：本遺構からは全部で 157 点 (1,575.6g) の遺物が出土した。このうち弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器が 154 点 (1,560.0g) を占める。土師器の多くは本遺構北辺の先端部上層から集中して出土した (図版1-5)。このほか、近世陶器 2 点 (3.4g)、近世土器 1 点 (12.2g) が出土した。これらのうち土師器 11 点を図示した。

1 は甕形土器の口縁部破片である。2 は外面口縁部直下に巡る突帯部にヘラ状工具でキザミを入れる壺形土器である。吉ヶ谷式系統か。3 は甕形土器の口縁部破片である。4 と 5 は壺形土器の底部破片である。6 は小型台付甕形土器の脚部～胴部下半である。器壁が薄く、胎土の特徴が他の土師器と

第2表 第2号周溝状遺構出土遺物観察表

注：色の()は推定、1)は残存、1-は不明、計測不能

発掘番号	出土遺構	種類	部位	法量 (cm) 口径 器高 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	構成	色調	備考
9-1 5-1	SX02	土師器 甕形	口縁部	(12.8) —	25g	口縁部は緩やかに外反する。外面 斜位ヘラナデ。内面斜位ヘラナデ。	φ1mm 以下白色粒子中量 φ1mm 前後白色粒子少量	やや 良	外面：浅黄褐色 10YR8/4 内面：浅黄褐色 10YR8/3	・弥生後～古 墳前
9-2 5-2	SX02	土師器 甕形	口縁部	— —	8g	やや内彎型に立ち上る。裾部面 から二重口縁を呈する可能性。口 縁直下の突起にへら状工具による キズあり。内外面ともスビナ調整。	φ1mm 以下白色粒子中量 φ1mm 以下黄色粒子中量 φ1mm 以下赤色粒子少量 φ1mm 前後砂粒中量	良	外面：にじみ黄褐色 10YR7/4 内面：にじみ黄褐色 10YR7/4	・弥生後～古 墳前 ・吉ヶ谷式系 続か
9-3 5-3	SX02	土師器 甕形	口縁部	— —	9g	くの字状に突出する頸部から口縁 部に至る。外面斜位ヘラナデ。内 面口縁部斜位ヘラナデ。内面腹部 斜位ヘラナデ。	φ1mm 以下白色粒子中量 φ1mm 以下黄色粒子中量 φ1mm 以下赤色粒子少量 φ1mm 前後砂粒中量	やや 良	外面：褐色 5YR6/6 内面：灰黄褐色 10YR4/2	・弥生後～古 墳前
9-4 5-4	SX02	土師器 甕形	底部	— (8.2)	75g	底部から外反して立ち上る。内 外面に横位ヘラナデ。	φ1mm 以下白色粒子少量 φ1mm 以下黄色粒子中量 φ1mm 以下赤色粒子少量 φ1mm 前後砂粒少量	やや 良	外面：浅黄褐色 2.5YR7/3 内面：黄褐色 2.5YR5/1	・弥生後～古 墳前
9-5 5-5	SX02	土師器 甕形	底部	— (4.5)	80g	底部から緩やかに内彎して頸部 に至る。外面斜位ヘラナデ。外面横 位ヘラナデ。	φ1mm 以下白色粒子少量 φ1mm 以下黄色粒子中量 φ1mm 以下赤色粒子少量 φ1mm 前後砂粒中量	良	外面：褐色 5YR6/6 内面：褐色 5YR6/6	・弥生後～古 墳前
9-6 5-6	SX02	土師器 小型 白付甕形	胴部	— —	92g	胴部上下は緩やかに内彎して立ち 上る。胴部は頸部にかけて外反。 外面胴部下半端位・斜位のヘラナ デ。外面胴部横位ヘラナデ。	φ1mm 以下白色粒子少量 φ1mm 前後黄色粒子中量	良	外面：暗褐色 7.5YR3/3 内面：にじみ褐色 7.5YR6/4	・弥生後～古 墳前 ・瀬戸土器か
9-7 5-7	SX02	土師器 甕形	胴部	— —	132g	緩やかに内彎して立ち上る。内 外面に斜位・横位ヘラナデ。外面 の一部に赤彩の痕跡。	φ1mm 以下黄色粒子中量 φ1mm 以下赤色粒子少量 φ1mm 前後砂粒少量	やや 良	外面：にじみ褐色 7.5YR7/4 内面：黄褐色 2.5Y5/1	・弥生後～古 墳前
9-8 5-8	SX02	土師器 高坏形	口縁部	— —	34g	胴部から口縁部にかけて直線的に 立ち上る。内外面ともに横位・ 斜位ヘラナデ。	φ1mm 以下白色粒子中量 φ1mm 以下黄色粒子中量 φ1mm 以下赤色粒子少量 φ1mm 前後砂粒少量	良	外面：暗赤褐色 5YR3/4 内面：にじみ赤褐色 5YR5/4	・弥生後～古 墳前
9-9 5-9	SX02	土師器 小型甕形	口縁部	(8.2) —	30g	胴部はやや内彎しながら頸部に至 り、頸部での字状に突出して口 縁部に至る。内外面ともに斜位ヘ ラナデ。	φ1mm 以下白色粒子中量 φ1mm 以下黄色粒子中量 φ1mm 以下赤色粒子少量 φ1mm 前後砂粒中量	やや 良	外面：褐色 10YR4/6 内面：黄褐色 10YR5/6	・弥生後～古 墳前
9-10 5-10	SX02	土師器 器台	受部 脚台部	受部径 (8.8)	92g	受部は内彎したくの字状。緩やかに 突出する脚台部には外面から3方向 円形穿孔。中央に径 2.1～1.3cm の穿孔。内外面に斜位ヘラナデ。	φ1mm 以下黄色粒子中量 φ1mm 以下赤色粒子中量 φ1mm 以下赤色粒子少量 φ1mm 前後砂粒少量	やや 良	外面：浅黄褐色 10YR8/4 内面：浅黄褐色 10YR8/4	・弥生後～古 墳前
9-11 5-11	SX02	土師器 器台	脚台部	— —	28g	受部中央に推定径 1.1cmの孔。受 部の大半が欠損。外面脚台部前・ 斜位ヘラナデ。内面脚台部斜位 ヘラナデ。内面受部横位ヘラナデ。	φ1mm 以下白色粒子中量 φ1mm 前後黄色粒子少量 φ1mm 以下赤色粒子少量	良	外面：黄褐色 7.5YR7/6 内面：暗赤褐色 2.5YR5/8	・弥生後～古 墳前

異なることから、他地域からの搬入品である可能性がある。7は壺形土器の胴部破片である。外面に赤彩を施す。8は高坏形土器の口縁部破片1点である。9は小型甕形土器である。10は器台である。脚台部に外側から内側への穿孔を3箇所穿つ。また成形後に外面脚台部上位～受部下位に粘土を貼付している。11は器台である。

時期

近世期の遺物が少量出土するが、これは本遺構を切る第6号溝跡など後世の遺構からの流れ込みによるものと考えられる。大部分を占める土師器の年代から弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭と考えられる。

第3号周溝状遺構 - SX03

遺構(第8図 図版1-3・6)

位置：2区B・C-3グリッド及びD-3・4グリッド。重複関係：第2号周溝状遺構、第4号溝跡、第6号溝跡、第7号溝跡に切られる。平面形・規模：本遺構は2区の中央部と西側の2箇所で見出され、周溝状遺構の北東～南東辺と北西辺の一部を構成すると推定される。遺構確認面の標高は2.86mである。東側の検出部分は、弧状に彎曲して北西～南東方向に延び、南東側は第2号周溝状遺構との

重複部で屈曲して南西方向に調査区外へと延びる。東側の検出規模は長さ 0.95m、幅 1.14m を測る。東側の大部分は第 2 号周溝状遺構に切られるが、内側縁辺のラインは第 2 号周溝状遺構北西辺の外側縁辺のラインと一致する。したがって、本遺構南東辺と第 2 号周溝状遺構の北西辺の一部は共有されていた可能性がある。

一方、北東～南東辺に続くものと思われる北西辺が 2 区西側から検出された。西側は第 4 号溝跡に切れ、北側及び南側が調査区外に続く。調査区内では長さ 2.58m、幅 1.07m を測る。北西辺の東側縁辺は弧状を呈する。本遺構の推定全長は 7.50m 程と考えられる。周溝：B-B' 断面での断面形は漏斗状を呈し、上端幅 1.66m、下端幅 0.96m、遺構確認面からの深さ 0.86m を測る。底面の標高は 1.84～1.94m であり南東から北西へ向かって下る。底面は内壁際が深く、外壁際は平坦である。両壁面は垂直に立ち上がり、中位で外傾して直線的に立ち上がる。C-C' 断面では西側を第 4 号溝跡に切られているため詳細は不明だが、浅い不整形を呈すると考えられる。覆土：B-B' 断面の覆土は 11 層に区分される。底面南側の 10 層はシルトブロックが中量含まれるため、周溝内側の周堤が崩落したことによる堆積層である可能性がある。9～5 層は自然堆積層であるが、4 層はシルトブロックを中量含み厚く堆積することから、人為的な埋め戻し層である可能性がある。

遺物

出土状況：本遺構からは全部で 6 点 (34.5g) の遺物が出土した。全て弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器であるが、小破片のため図示できなかった。

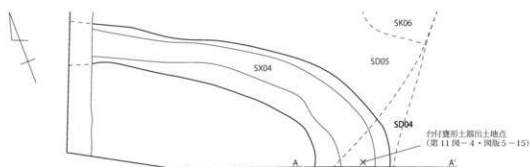
時期

出土遺物から、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭。

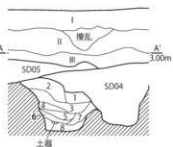
第 4 号周溝状遺構 - SX04

遺構 (第 10 図 図版 2-1)

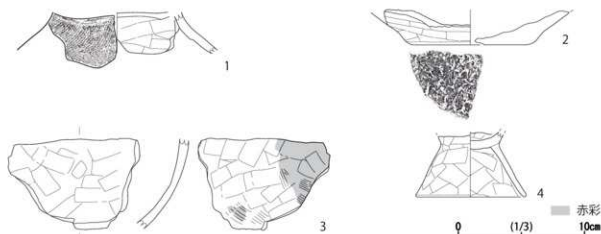
位置：2 区 B-3 グリッド。重複関係：第 4 号溝跡と第 5 号溝跡に切られる。平面形・規模：北西側と南側が調査区外に延びるため全形は不明であるが、周溝状遺構の北東辺と思われる。北東辺は調査区南壁際で屈曲し、南西方向に延びると推定される。この延長線上には 1 区第 1 号土坑が検出されており、これが周溝状遺構の南東隅を構成する可能性がある。調査区内では長さ 3.40m、幅 1.30m、遺構確認面の標高は 2.75m を測る。1 区第 1 号土坑が本遺構の一部を構成していた場合、全体の規模は約 9.0m と推定される。主軸方位：N-60°-W を測る。周溝：断面形は漏斗状を呈する。上端幅 0.38～0.82m、下端幅 0.20～0.38m、遺構確認面からの深さ 0.56m を測る。底面の標高は 1.99～2.14m と、南から北へ向かって下る。底面は平坦で、両壁面は急な傾きで外傾して立ち上がり、中位にて外方に屈曲して直線的に立ち上がる。覆土：8 層に区分される。6 層・4 層・3 層は西側からの土砂の流れ込みによる堆積層と考えられる。これに対して 7 層は、東側からの土砂の流れ込みによる堆積層と考えられる。さらに 7 層はシルトブロックを多量に含むことから、人為的な埋め戻し層である可能性がある。



- SX04
土器説明 (A A')
1層 10YR3/2 黒褐色シルト 締まりやや強い 粘性弱い
明黄褐色シルト粒少量含む
2層 10YR4/2 灰黄褐色シルト 締まりやや強い 粘性弱い
明黄褐色シルトブロック多量含む
3層 10YR2/2 黒褐色シルト 締まりやや強い 粘性弱い
明黄褐色シルトブロック少量含む
4層 10YR2/3 黒褐色シルト 締まり強い 粘性強い 明黄
褐色シルトブロック多量含む
5層 10YR3/2 黒褐色シルト 締まり非常に強い 粘性強い
明黄褐色シルト粒少量含む
6層 10YR4/3 に近い黄褐色シルト 締まり強い 粘性強い
明黄褐色シルトブロック多量含む
7層 10YR3/3 暗褐色シルト 締まり非常に強い 粘性なし
明黄褐色シルトブロック多量含む
8層 10YR3/1 黒褐色シルト 締まり強い 粘性強い 明黄
褐色シルト粒少量含む



第10図 第4号周溝状遺構実測図 (SX04)



第11図 第4号周溝状遺構出土遺物実測図 (SX04)

第3表 第4号周溝状遺構出土遺物観察表

注量の () は測定、[] は測存、—は不明・計量不能

図版番号	出土遺構	種類	部位	法量 (cm) 口径 器高 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	構成	色調	備考
11-1 5-12	SX04	土師器 蓋形	胴部	— —	29g	胴部から縁やかに外反して立ち上がる。外面には黒赤文斜位横文後、5字連続彫文。内面横彫・斜位ヘラナデ。	φ 1mm 前後白色粒子中量 φ 1mm 以下白色粒子中量 φ 1mm 前後砂粒少量	良	外面：灰黄褐色 10YR6/2 内面：灰黄褐色 10YR5/2	・赤生後～古墳前
11-2 5-13	SX04	土師器 蓋形	底面	— (φ)20	67g	平底から縁やかに外反して立ち上がる。底面に斜位横文の痕跡が認められるが不明。外面斜位ヘラナデ。内面は摩耗で調整不明。	φ 1mm 以下白色粒子少量 φ 1mm 前後黒色粒子中量 φ 1mm 前後砂粒中量	やや良	外面：にぶい黄褐色 10YR6/4 内面：にぶい黄褐色 10YR5/3	・赤生後～古墳前 ・11-3と同一体か?
11-3 5-14	SX04	土師器 蓋形	胴部	— —	60g	縁やかに内彎して立ち上がる。外面は斜位調整後、横位および斜位のヘラナデ。内面横彫・斜位ヘラナデ。外面に赤彩の痕跡。	φ 1mm 前後白色粒子多量 φ 1mm 前後黒色粒子中量	やや良	外面：にぶい黄褐色 10YR7/4 内面：浅黄褐色 10YR8/4	・赤生後～古墳前 ・11-2と同一体か?
11-4 5-15	SX04	土師器 付付遺形	胴付部	— 8.5	97g	胴付部はハの字状に開く。外面は斜位のクズリの後斜位のヘラナデ。胴部内面は斜位ヘラナデ。体部内面はヘラナデ。	φ 1mm 以下白色粒子中量 φ 1mm 前後黒色粒子中量 φ 1mm 前後赤色粒子中量	良	外面：褐色 5YR6/8 内面：褐色 5YR6/6	・赤生後～古墳前

遺物（第11図 第3表 図版5-12～15）

出土状況：本遺構からは全部で12点（337.1g）の遺物が出土した。全て弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器である。これらのうち4点を図示した。1は壺形土器の肩部破片である。外面肩部に燃系文斜位施文の後、S字状結節文を横位に1段施文する。2と3は壺形土器で、胎土の特徴から同一個体の可能性がある。外面胴部にハケ調整と赤彩を施す。4は台付甕形土器の脚台部破片である。脚台部がハの字状に開く。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭。

第5号周溝状遺構—SX05

遺構（第12図 図版1-7・8）

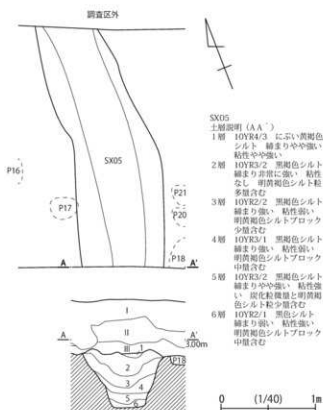
位置：2区C-3・4グリッド。重複関係：第17号ピットに切られる。平面形・規模：調査区内では弧状を呈する。南北方向は調査区外に延びる。周溝状遺構の東辺部分と推定される。調査区内では長さ2.50m、幅1.40m、遺構確認面は標高2.87mを測る。主軸方位：N-7°-Eを測る。周溝：断面形は逆台形を呈し、上端幅0.75～0.93m、下端幅0.20～0.48m、遺構確認面からの深さ0.85m程度である。底面標高は2.30～2.34mを測り、ほぼ水平である。覆土：6層に区分される。いずれの層も自然堆積層と考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは全部で5点（52.1g）の遺物が出土した。弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器が3点（10.6g）と近世磁器2点（41.5g）である。いずれも小破片のため図示できなかった。

時期

覆土の堆積状況が第2・4号周溝状遺構の覆土と類似する。また出土遺物は、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器3点、近世磁器2点と異なる時代の遺物が出土したが、出土した近世磁器は後世の流れ込みによるものと考えられる。遺構形状と覆土の類似性から、本遺構は弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭に帰属すると考えられる。



第12図 第5号周溝状遺構実測図 (SX05)

2 溝跡

第1号溝跡—SD01

遺構 (第13図 図版2-2)

位置：1区A-5グリッド。重複関係：第1号土坑を切る。
 主軸方位：N-26°-Eを測る。平面形・規模：本遺構は調査区内で直線状を呈する。南北の両端が調査区外に延び、西側は調査区外に広がる。遺構確認面の標高は1.76mを測る。断面形はU字形を呈する。概ね平坦な底面から緩やかな傾きで壁面は立ち上がる。底面北側では深さ約0.1mの掘り込みが見られる。調査区内では長さ2.45m、幅0.45m、遺構確認面からの深さ0.20mを測る。覆土：3層に分定できる。いずれも自然堆積層と考えられる。

遺物 (第14図 第4表 図版5-16)

出土状況：本遺構からは全部で2点(26.8g)の遺物が出土した。全て弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器である。これらのうち壺形土器の頸部破片1点を図示した。外面頸部に燃糸文を格子状に施す。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭。



第14図 第1号溝跡出土遺物実測図 (SD01)

第4表 第1号溝跡出土遺物観察表

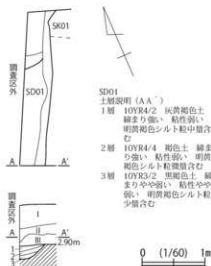
探検番号	出土遺構	種別・形状	部位	法量 (cm) 口径 器高 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	硬度	色調	備考
14-1	SD01	土師器 壺形	頸部	—	19g	縦やかに対称して立ち上がる。外面は燃糸文を格子状に施す。内面横位へラナズ。	φ1mm以下白色粒子中量 φ1mm以下黒色粒子少量 φ1mm以下赤色粒子少量	且	外面：赤褐色 5YR4/4 内面：赤褐色5YR4/6	・弥生後半～古墳前 ・兼人土器か

3 土坑

第1号土坑—SK01

遺構 (第15図 図版2-3)

位置：1区A-5グリッド。重複関係：第1号溝跡に切られる。平面形・規模：本遺構の西側は第1号溝跡に切れ、北側は調査区外に広がるため全体の形状は不明である。本遺構は2区の西側に検出された第4号周溝状遺構の南西側への延長線上に位置しているため、第4号周溝状遺構の南東隅部分を構成する可能性がある。遺構確認面の標高は2.70mを測る。断面形は底面に細かな起伏を有する浅い皿形を呈する。壁面は緩やかな傾きで立ち上がり、底面との境界は不明瞭である。調査区内では長さ1.64m、幅0.50m、



第13図 第1号溝跡実測図 (SD01)

SD01
土層説明 (AA')
 1層 10YR4/2 灰黄褐色土
 細まり強、粘性弱、
 明黄褐色シルト粒中量含む
 2層 10YR4/4 褐色土 細ま
 り強、粘性弱、明
 褐色シルト粒微量含む
 3層 10YR3/2 黒褐色土 細
 まりやや強、粘性やや
 強、明黄褐色シルト粒
 少量含む

遺構確認面からの深さ0.16mを測る。主軸方位：N-70°-Wを測る。覆土：3層に区分できる。いずれも自然堆積層と考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは全部で9点(48.9g)の遺物が出土した。全て弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器であるが、小破片のため図示できなかった。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭。

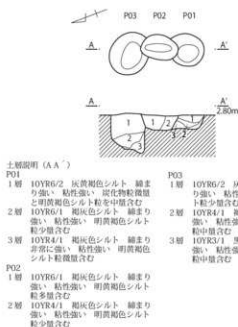
4 ビット

遺構(第16図 図版2-4)

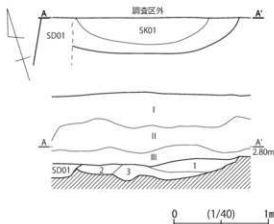
本調査区では弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭に帰属するビットを4基検出した。第1～3号ビットは1区E-6・7グリッド、第8号ビットは1区B-6グリッドに所在する。これらのうち、第2号ビットと第8号ビットからは当該期の土師器が出土した。また、第1号ビットと第3号ビットは第2号ビットに切られるため、出土遺物及び重複関係から、これら4基のビットは弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭に帰属すると推定される。

遺物

第2号ビットから、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器1点(5.4g)が出土した。また第8号ビットからも同時期の土師器1点(2.1g)が出土した。いずれも小破片のため図示できなかった。



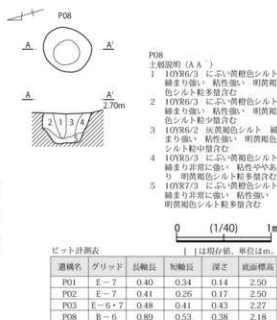
第16図 第1・2・3・8号ビット実測図(P01・P02・P03・P08)



SK01
土師説明(AA')

- 1層 IOYR4/2 灰黄色土 締まり強い、粘性強い
- 2層 IOYR3/4 に近い黄褐色シルト 締まりややあり、粘性強い、明黄褐色シルト粘少量含む
- 3層 IOYR3/4 暗褐色土 締まりややあり、粘性やや強い、明黄褐色シルト粘少量含む

第15図 第1号土坑実測図(SK01)



ビット計測表

1は現存時、単位はm。

遺構名	グリッド	長軸径	短軸径	深さ	底面標高
P01	E-7	0.40	0.34	0.14	2.50
P02	E-7	0.41	0.26	0.17	2.50
P03	E-6・7	0.48	0.41	0.43	2.27
P08	B-6	0.89	0.53	0.38	2.18

第2節 中世の遺構と遺物

1 溝跡

第3号溝跡—SD03

遺構（第17図 図版2-5・6）

位置：1区B-D-5・6グリッド。重複関係：第1号周溝状遺構を切り、第1号井戸跡、第7号土坑に切られる。平面形・規模：調査区内では弧状に検出された。東側は第1号井戸跡に重複し、調査区外の北東方向に延びるものと推定される。また検出範囲の中央部分では第7号土坑と重複するが、その延長部分が第7号土坑の西側の調査区壁際で確認されたため、西側は調査区外の北西方向に延びると考えられる。遺構確認面の標高は2.68mである。調査区内では長さ10.86m、幅1.85mを測る。断面形はD-D'断面でU字型を呈する。上端幅1.00～1.10m、下端幅0.25～0.35m、遺構確認面からの深さは0.80～0.95mを測る。底面は第1号井戸跡際から西へ向かってわずかに上り、中央部の段差から西へ向かって下る。そして第7号土坑との重複部分の手前において底面が0.27m立ち上がり、堰を形成する。さらに、その西側に隣接して南北0.75m、東西0.30mを測る隅丸方形の掘り込みによる堰を形成する。一方、第7号土坑の西側では西に向かって上る。覆土：13層に区分できた。底面直上の13層は多くの砂を含むため、水流に伴う堆積層と推定される。また調査中の所見として、第2号井戸跡との境界に検出された隅丸方形の掘り込み内の覆土にも砂が多く含まれていた。東より流れる水が第2号井戸跡に流下する際に、この2箇所の堰が砂泥を除去する機能を担ったと考えられる。

遺物（第18図 第5表 図版6-1）

出土状況：本遺構からは全部で13点（107.2g）の遺物が出土した。このうち弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器が10点（60.6g）と大部分を占める。この他、中世陶器2点（40.1g）と近世磁器1点（6.5g）が出土した。これらのうち底面付近で出土した14世紀代の瀬戸美濃産の緑釉陶器小皿を1点図示した。

時期

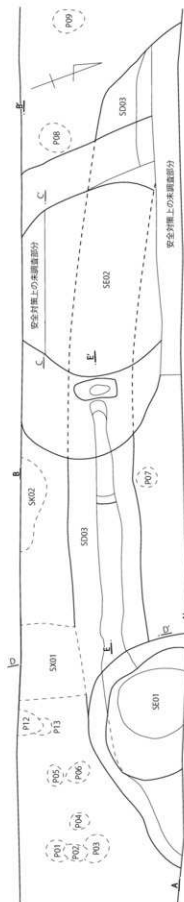
出土遺物の多くは弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器であるが、これは本遺構に切られる第1号周溝状遺構からの流れ込みによるものと考えられる。また近世磁器についても後世の流れ込みによるものと考えられる。本遺構底面付近から出土した瀬戸美濃産の緑釉小皿から、本遺構は14世紀に帰属するものと考えられる。

2 井戸跡

第1号井戸跡—SE01

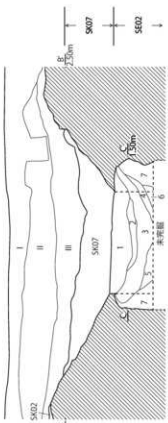
遺構（第17図 図版2-6）

位置：1区D・E-6グリッド。重複関係：第3号溝跡を切る。平面形・規模：北側が調査区外に広がるが、平面形は東西に長軸を持つ楕円形を呈すると思われる。長軸3.80m、短軸1.50m以上を測る。遺構確認面の標高は2.79mである。湧水のため遺構確認面から深さ1.10mまでを調査し、以下は未完掘とした。断面形は漏斗状を呈する。東半部の遺構確認面直下ではテラス状の平坦面が形成される。遺構確



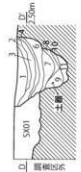
土層別 (AA')

- 1層 107R4.4 礫石上、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 2層 107R4.2 礫石上、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 3層 107R4.2 礫石上、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 4層 107R5.4 礫石上、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 5層 107R5.4 礫石上、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 6層 33X1 砂・シルト質土、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 7層 107R5.1 礫石上、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状



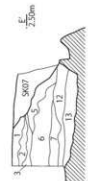
土層別 (BB')

- 1層 25V4.2 礫石質シルト、埋まり強、粘り強、上層部は明瞭なシルト・フロック中層状
- 2層 25V4.2 礫石質シルト、埋まり強、粘り強、上層部は明瞭なシルト・フロック中層状
- 3層 25V3.2 礫石質シルト、埋まり強、粘り強、上層部は明瞭なシルト・フロック中層状
- 4層 107R4.1 礫石質シルト、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 5層 107R5.1 礫石質シルト、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 6層 107R5.1 礫石質シルト、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 7層 107R5.1 礫石質シルト、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状



土層別 (DD')

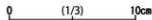
- 1層 107R4.4 礫石上、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 2層 107R4.2 礫石上、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 3層 107R4.2 礫石上、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 4層 107R4.2 礫石上、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 5層 107R5.4 礫石上、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 6層 107R4.6 礫石上、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状



土層別 (EE')

- 7層 107R4.2 礫石質シルト、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 8層 107R5.4 礫石上、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 9層 107R5.4 礫石上、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 10層 107R5.3 礫石上、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 11層 107R4.2 礫石上、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 12層 107R4.2 礫石上、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状
- 13層 107R5.3 礫石上、埋まり強、粘り強、明瞭なシルト・フロック中層状

第17図 第3号溝跡、第1・2号井戸跡実測図 (SD03・SE01・SE02)



第18図 第3号溝跡出土遺物実測図 (SD03)

第5表 第3号溝跡出土遺物観察表

法量の()は推定、| |は残存、-は不明・計測不能

検出番号	出土遺物	種別 形種	部位	法量 (cm) 口径 器高 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
18-1	SD03	緑釉陶器 小皿	底面	-	39g	ロクロ成形。底面回転削り。外面 胴部に白濁釉付着。	色調：灰白色 10YR8/2 胎土質：中砂質 含有粘土：砂粒極少量	不良	外面：灰白色 10YR8/2 内面：灰白色 10YR8/2	・瀬戸美濃産 ・14世紀
6-1				4.8						

認めから0.84m以下では壁面が垂下する。遺構確認面から深さ0.56mでは平面形が東西方向に長軸を持つ楕円形を呈し、長軸2.16m、短軸1.20m以上を測る。覆土：調査範囲において7層の堆積を確認した。最下層の7層は人為的な埋め戻し層と考えられる。6層以上については自然堆積層と考えられる。

遺物

出土状況：本遺構から遺物は出土していない。

時期

本遺構から遺物は出土していないが、他に検出された中世期の井戸跡と形態的特徴の類似性を認められることから本遺構の年代も中世期と推定される。

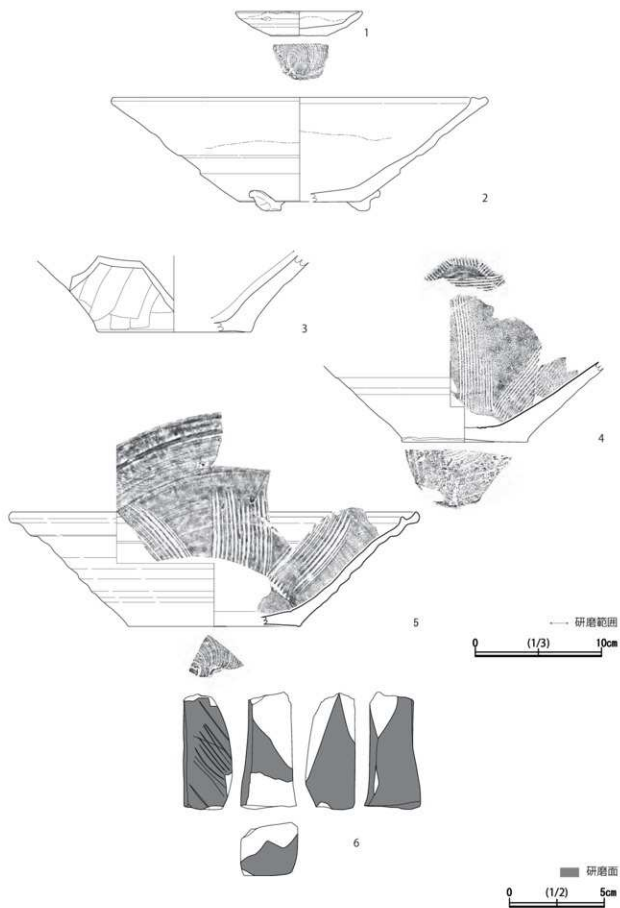
第2号井戸跡 - SE02

遺構 (第17図 図版2-5・3-1)

位置：1区B・C-5・6グリッド。重複関係：第7号土坑に切られる。平面形・規模：南北両側が調査区外に広がるが、遺構確認面での平面形は東西軸3.00mの円形または楕円形を呈する。遺構確認面の標高は1.89mを測る。湧水により遺構確認面(第7号土坑底面)から深さ0.68mまでを調査し、以下は未調査とした。本遺構及び第7号土坑の土層断面図(第22図)では、両遺構の境界から本遺構の壁面がオーバーハングするかのよう表されているが、これは断面図作成位置の移動に伴うものであり、実際の壁面は遺構確認面から垂下する。覆土：調査範囲において6層の堆積を確認した。堆積状況及び覆土中のシルトブロックの含有量などから、いずれの堆積層も人為的な埋め戻し層である可能性がある。本遺構の確認面と上位に検出された第7号土坑の最下層下面との間には、酸化鉄粒を多量に含む不整合面が広がり、本遺構が機能を失った後に、第7号土坑の掘削・使用が行われたものと考えられる。

遺物 (第19図 第6表 図版6-2~7)

出土状況：本遺構からは全部で20点(1172.0g)の遺物が出土した。弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器3点(67.1g)、中世陶器16点(1037.6g)、砥石1点(67.3g)である。一部の中世陶器は、本遺構の上位で検出した第7号土坑出土遺物と接合した。接合資料を含めて、中世陶器5点と石製品1点を図示した。1は瀬戸美濃産の緑釉陶器小皿である。内外面に煤が付着し、灯明皿として利用されたと考えられる。14世紀代。2は瀬戸美濃産の灰釉陶器直縁大皿である。底部に三



第 19 图 第 2 号井戸跡出土遺物実測図 (SE02)

第6表 第2号井戸跡出土遺物観察表

探検番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 口径 高さ 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	構成	色調	備考
19-1 6-2	SE02	鉄軸 陶器 小皿	口縁 ～ 底部	(10.0) (1.9) 4.6	29g	ロクロ成形。底部回転糸切り痕。内外面口縁部に灰緑色の鉄軸を嵌軸。	色調：焼灰色 10YR6/1 胎土質：やや粗 含有粒子：砂粒少量	良	外面：灰オリーブ色 5Y5/3 内面：灰オリーブ色 5Y4/2	・瀬戸美濃産 ・14世紀代 ・灯明皿か
19-2 6-3	SE02	鉄軸 陶器 大皿	口縁 ～ 底部	(29.0) (9.0) (9.0)	194g	ロクロ成形。底部に回転糸切り痕。蓋球大皿。内外面口縁部に鉄軸を嵌軸すか白濁。底部に三足を彫付け。	色調：灰黄褐色 10YR8/3 胎土質：粗 含有粒子：砂粒中量	不良	外面：オリーブ褐色 5Y6/4 内面：灰オリーブ色 5Y5/3	・瀬戸美濃産 ・14世紀代
19-3 6-4	SE02	鉄軸 陶器 コネ鉢	底部	— (12.0)	165g	ロクロ成形。外面底部砂付着。外面胴部へつ工具で上方への削り痕。	色調：焼灰色 10YR4/1 胎土質：粗 含有粒子：砂粒多量	良	外面：にぶい黄褐色 10YR5/3 内面：赤褐色 5YR4/6	・富津産 ・14世紀代
19-4 6-5	SE02	鉄軸 陶器 スリ鉢	底部	— (8.0)	217g	ロクロ成形。欄目歯数 12 本 /26 ～27mm 幅。内底部に一字状欄目。	色調：灰白色 10YR8/2 胎土質：やや粗 含有粒子：一	良	外面：にぶい赤褐色 5YR4/4 内面：にぶい赤褐色 5YR4/3	・瀬戸美濃産 ・16世紀代
19-5 6-6	SE02	鉄軸 陶器 スリ鉢	口縁 ～ 底部	(28.8) (9.2) (10.0)	265g	ロクロ成形。底部左回転糸切り痕。内面口縁部に突部。欄目歯数 11 本 /46 ～ 47mm 幅。	色調：灰黄褐色 10YR8/3 胎土質：やや粗 含有粒子：砂粒少量	良	外面：焼灰色 10YR4/1 内面：黒褐色 10YR3/1	・瀬戸美濃産 ・16世紀代

法量の()は推定、|は残存、-は不明・計測不能

探検番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
19-6 6-7	SE02	石製品 砥石	[6.1]	3.0	2.5	67g	凝灰岩製。色調：明黄褐色 10YR7/6。四角柱の磨滅石の端部と推定される。端部と欠損部を除く4面に研磨面。研磨により中位が丸れてくる。一面に斜方向の平行線状の研磨痕。

足を貼付する。14世紀代。3は常滑産の無軸陶器コネ鉢である。内面は使用により器面が滑らかとなる。4と5は共に瀬戸美濃産の鉄軸陶器スリ鉢である。内外面に鉄軸を掛ける。16世紀代。6は凝灰岩製の持底石である。一面を除き直方体の各面に研磨痕が確認できる。

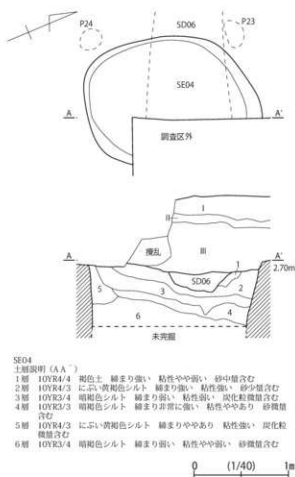
時期

本遺構から出土した遺物において年代的な上限を示すのが14～16世紀の中世陶器である。また、第7号土坑との先後関係から、本遺構は第7号土坑より古い14～16世紀の所産であると推定される。

第4号井戸跡—SE04

遺構(第20図)

位置：2区E-3・4グリッド。重複関係：第6号溝跡に切られる。平面形・規模：本遺構の東側は調査区外に広がるが、遺構確認面での平面形は長軸1.92mを測る楕円形を呈



第20図 第4号井戸跡実測図(SE04)

する。遺構確認面の標高は2.66mを測る。湧水のため遺構確認面から深さ0.66mまで調査を行い、以下は未調査とした。壁面は垂下する。覆土：調査範囲において6層の堆積を確認した。5層と6層は南側からの土砂の流れ込みによる堆積層である。いずれも自然堆積層と考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは全部で3点(5.3g)の遺物が出土した。これらのうち1点(3.9g)は弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器であり、これに中世陶器2点(1.4g)が加わる。いずれも小破片のために図示できなかった。

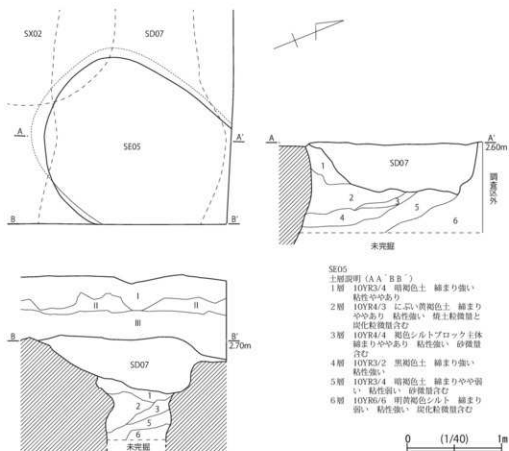
時期

出土遺物は、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器と中世陶器であるが、他に検出された中世期の井戸跡との形態的特徴の類似性から、本遺構は中世期の所産と考えられる。

第5号井戸跡—SE05

遺構(第21図 図版3-2)

位置：2区E・F-3グリッド。重複関係：第2号周溝状遺構を切り、第7号溝跡に切られる。平面形・規模：本遺構は東側が調査区外に広がるが、遺構確認面での平面形は長軸2.24m以上、短軸1.72mを測る楕円形を呈する。遺構確認面の標高は2.76mを測る。湧水により遺構確認面から深さ0.90m



第21図 第5号井戸跡実測図(SE05)

までを調査し、以下は未調査とした。A-A'断面では南壁面がオーバーハングして下ることから、断面形は袋状を呈すると考えられる。覆土：調査範囲において6層の堆積を確認した。いずれも自然堆積層である。6～4層は北側からの土砂の流れ込みによる堆積層と考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは全部で6点(27.2g)の遺物が出土した。これらのうち4点(7.9g)は弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器であり、これに中世陶器1点(16.7g)と近世陶器1点(2.6g)が加わる。いずれも小破片のため図示できなかった。

時期

出土遺物は、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器と近世陶器が出土するが、他に検出された中世期の井戸跡と形態的特徴の類似性を認められることから、本遺構の年代も中世期と推定される。

3 土坑

第7号土坑—SK07

遺構(第22図 図版3-1)

位置：1区B・C-5・6グリッド。重複関係：第2号井戸跡と第3号溝跡を切る。平面形・規模：本遺構は南北両側が調査区外に広がり、全形は明らかではない。検出された西側の形状が南北に直線状を呈するのに対して、東側では半円形を呈する。調査区内では東西長5.04m、南北長2.22m、遺構確認面の標高2.50mを測る。断面形は箱葉形を呈し、平坦な底面から壁面は外傾して立ち上がる。上端幅3.90～5.04m、下端幅1.63～3.00m、遺構確認面からの深さ0.76mを測る。第3号溝跡が接続する東壁面下位には、南北方向に長軸をもつ隅丸方形の掘り込みが検出された。これは第3号溝跡から第2号井戸跡へ排水するための施設であると考えられる。覆土：5層に区分できる。第2号井戸跡の確認面が本遺構の底面であるが、その上下で堆積層の連続性は認められない。つまり、本遺構は第2号井戸跡が機能を失った後に掘削・使用されたと考えられる。底面直上の4層と5層では砂の含有が認められない。堆積層はいずれも自然堆積層であると考えられる。

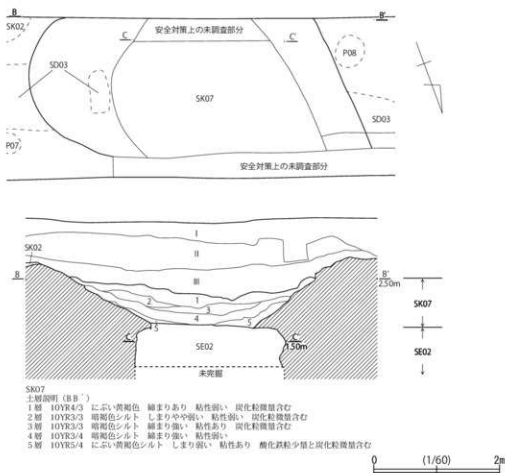
遺物(第23・24図 第7表 図版7)

出土状況：本遺構からは、全部で46点(2831.0g)の遺物が出土した。このうち中世陶器は20点(1445.5g)と主体を占める。加えて弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器17点(211.0g)と中世以降の生産関連遺物(鉄滓)3点(210.0g)、石製品6点(964.5g)が出土した。これらのうち、中世陶器5点と石製品4点を図示した。1は常滑産の無軸陶器コネ鉢である。底部は付高台を有する。外面胴部は回転削り痕が確認できる。内面底部が使用により平滑となる。13世紀代。2は常滑産の無軸陶器壺である。3は常滑産の無軸陶器壺である。4は常滑産の無軸陶器小形甕である。口縁部がN字状断面を呈する。5は常滑産の無軸陶器甕である。3～5はいずれも14世紀代と推定される。6と7は砥石である。6は凝灰岩製の持砥石である。7は四角柱の置砥石であり、中位が磨研により抉れて細くなる。8と9にはいずれも研磨痕が残る石製品であるが、使用用途は不明である。

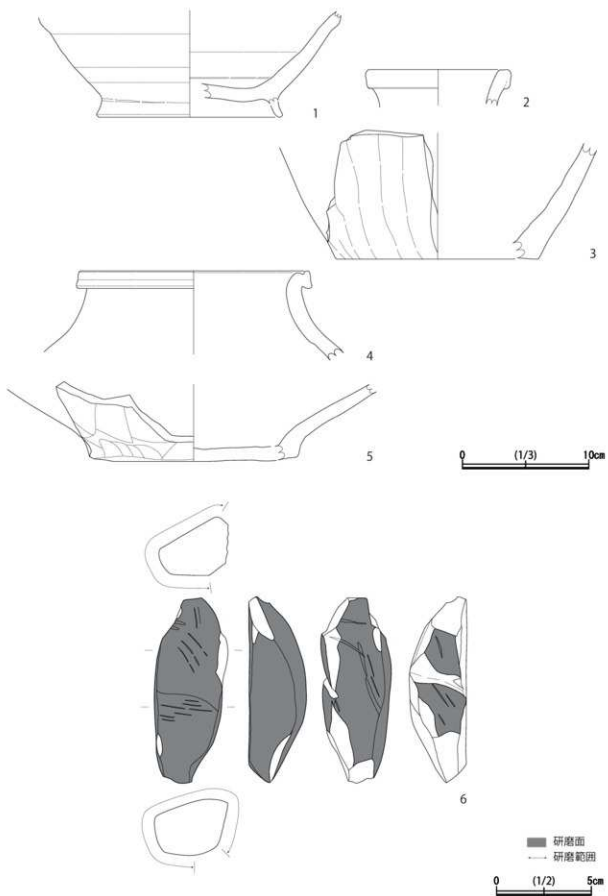
時期

本遺構から出土した遺物の年代的上限を示すのは14～16世紀の中世陶器である。出土遺物の一

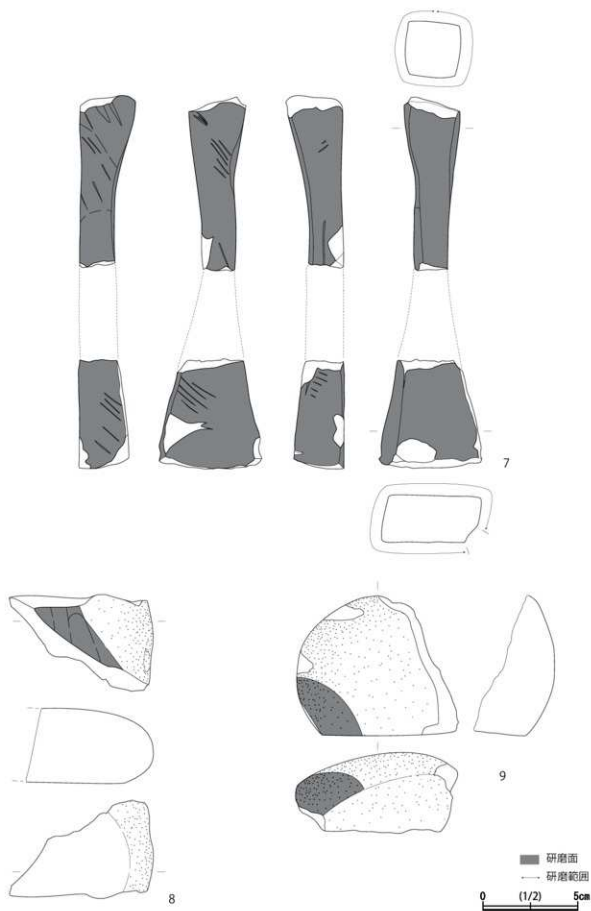
部は、本遺構の下位で検出された第2号井戸跡出土遺物と接合し、年代幅も一致した。しかしながら、本遺構と第2号井戸跡は層位的な先後関係が認められ、第2号井戸跡が埋没した後に、本遺構が掘削・使用されたことは明らかである。したがって、本遺構は第2号井戸跡よりも新しい、14～16世紀の所産であると推定できる。



第22図 第7号土坑実測図 (SK07)



第23图 第7号土坑出土文物实测图(SK07)(1)



第24图 第7号土坑出土遗物实测图 (SK07) (2)

第7表 第7号土坑出土土物観察表

法量の()は測定、[]は残存、—は不明・計測不能

検体番号 図版番号	出土 遺構	種別 形態	部位	法量 (cm) □径 器底 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色 調	備考
23-1 7-1	SK07	無釉 陶器 コナ鉢	底部	— (14.0)	210g	ロケロ成形。内面胴部下位に高台輪模様。外面胴部回転へつ削り。彫付高台。	色調：灰黄褐色 10YR5/2 胎土質：粗 含有粒子：砂粒多量	良	外面：褐灰色 10YR4/1 内面：褐灰色 10YR5/1	・常滑産 ・13世紀代
23-2 7-2	SK07	無釉 陶器 皿	口縁部	(11.2) —	31g	粘土紐成形。口縁端部を折り返し。	色調：黒褐色 10YR3/1 胎土質：粗 含有粒子：砂粒多量	不良	外面：褐灰色 10YR4/1 内面：黒褐色 10YR3/1	・常滑産 ・14世紀代
23-3 7-3	SK07	無釉 陶器 甕	底部	— (16.0)	302g	粘土紐成形。外面底部砂付露。胴部下位にへつ状工具で上方への削り痕。	色調：褐灰色 10YR5/1 胎土質：粗 含有粒子：砂粒多量	良	外面：灰黄褐色 10YR5/2 内面：灰色 N6/0	・常滑産 ・14世紀代
23-4 7-4	SK07	無釉 陶器 皿	口縁部	(18.2) —	153g	粘土紐成形。口縁部がN字状断面を呈する。外面胴部に陶灰による自然粘。	色調：褐灰色 10YR6/1 胎土質：粗 含有粒子：砂粒多量	良	外面：灰黄褐色 10YR5/2 内面：褐灰色 10YR4/1	・常滑産 ・14世紀代
23-5 7-5	SK07	無釉 陶器 鉢	底部	— (16.0)	324g	粘土紐成形。外面底部砂付露。胴部下部部に自然粘。胴部下位にへつ状工具で削め上方への削り痕。内面底部に陶灰による自然粘。	色調：褐色 5YR5/6 胎土質：粗 含有粒子：砂粒多量	不良	外面：にぶい赤褐色 5YR5/3 内面：灰黄褐色 10YR4/2	・常滑産 ・14世紀代

法量の()は測定、[]は残存、—は不明・計測不能

検体番号 図版番号	出土 遺構	種別 形態	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 g	備 考
23-6 7-6	SK07	石製品 灰石	[9.8]	[3.6]	[3.1]	167g	凝灰岩製。色調：褐灰色 10YR5/1。持破石。両端面は研磨により板状に薄くなる。
24-7 7-7	SK07	石製品 灰石	[19.7]	[5.3]	[2.9]	217g	凝灰岩製。色調：褐灰色 10YR4/1。磨破石。四角柱を呈する。両端面を除く4面に研磨面を有する。中位は研磨により挟れて居れる。研磨面に斜方向の平行する線状研磨痕。刃物類を研いだ痕跡か。
24-8 7-8	SK07	石製品 不明	[7.6]	[5.2]	[3.9]	194g	輝緑岩製。色調：褐灰色 10YR4/1。板状を呈すると思われる。下面は破砕により平坦面を形成。上面は帯状の研磨痕が平行に走る。磨破石か。
24-9 7-9	SK07	石製品 不明	[7.3]	[8.0]	[3.1]	315g	安山岩製。色調：褐灰色 10YR6/1。下面は破砕により平坦面を形成。側面に研磨痕。擦石か。

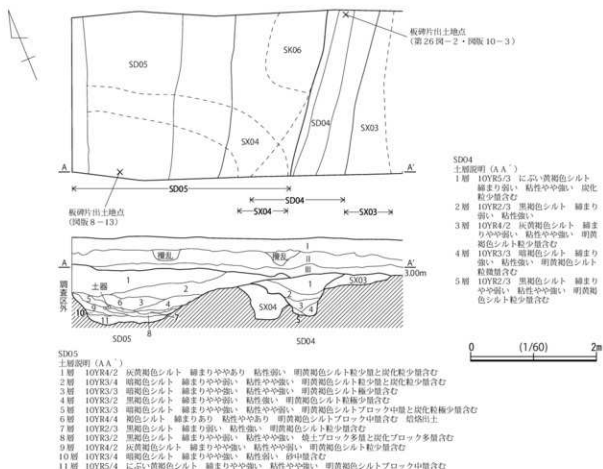
第3節 近世以降の遺構と遺物

1 溝跡

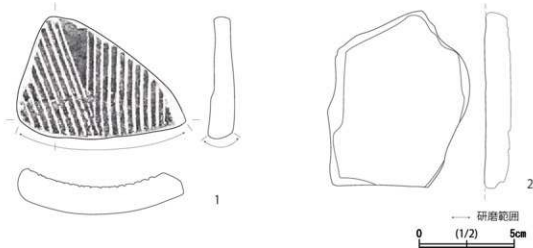
第4号溝跡—SD04

遺構（第25図 図版3—4～6）

位置：2区B・C—3グリッド。重複関係：第3号周溝状遺構、第4号周溝状遺構、第6号土坑を切り、第5号溝跡に切られる。主軸方位：N—37°—Eを測る。平面形・規模：調査区内では直線状を呈する。南北方向は調査区外に延びる。調査区内では長さ2.70m、幅1.50m、遺構確認面の標高2.92mを測る。底面の標高は2.15～2.22mを測り、南から北へ向かって下る。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦で壁面は東側で急な傾きで立ち上がり、中位で屈曲し緩やかな傾きとなる。西側は緩やかな傾きで立ち上



第25図 第4・5号溝跡実測図 (SD04・SD05)



第26図 第4号溝跡出土遺物実測図 (SD04)

第8表 第4号溝跡出土遺物観察表

注: 量()は推定、[]は測存、-は不明、計測不能

標記番号	出土遺物	種別	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
26-1 10-2	SD04	転用品 転用研具	8.9	6.4	1.3	91g	瀬戸内産産鉄軸スリ鉢断片を持砥石として転用。胴部下位部分を研磨部分とする。
26-2 10-3	SD04	石製品 砥石片	[9.3]	[7.5]	[1.3]	194g	緑泥片岩。一面に表面が残る。表面には刻字や割文は見られない。

がり、中位から上位は階段状を呈する。上端幅 1.47m、下端幅 0.36m、遺構確認面からの深さ 0.66m を測る。覆土：5層に区分できる。いずれも自然堆積層と考えられる。

遺物（第 26 図 第 8 表 図版 10-2・3）

出土状況：本遺構からは全部で 24 点（732.9g）が出土した。弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器 11 点（92.1g）の他、中世陶器 1 点（29.6g）、近世陶器 5 点（284.0g）、近世土器 3 点（33.0g）、土製品 1 点（9.2g）、石製品 2 点（194.0g）が出土した。石製品 3 点のうち 2 点は板碑片であり、これは第 5 号溝跡出土の板碑片と同一個体であると推定される。図示した 2 点のうち、1 は瀬戸美濃産の鉄軸陶器スリ鉢を砥石に転用した転用砥石である。2 は板碑片である。

時期

出土遺物の多くは弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器であるが、これらは本遺構に切られる第 4 号周溝状遺構からの流れ込みによるものと考えられる。本遺構は、近世に帰属する第 6 号土坑を切り、18 世紀代と推定される第 5 号溝跡に切られることから近世に帰属すると考えられる。

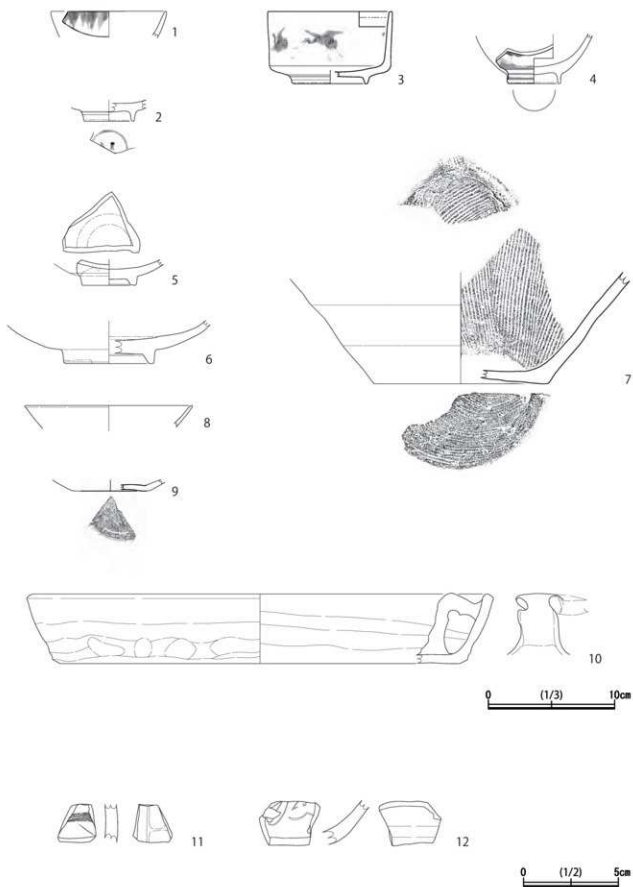
第 5 号溝跡—SD05

遺構（第 25 図 図版 3-3・4・7）

位置：2 区 B・C-2・3 グリッド。重複関係：第 4 号周溝状遺構と第 4 号溝跡、第 6 号土坑を切る。主軸方位：N-32°-E を測り、本調査区の南側に隣接する中央通りとほぼ直交する。平面形・規模：調査区内では直線状を呈する。南北方向が調査区外に延び、西側が調査区外に広がる。遺構確認面の標高は 3.06m である。調査区内では長さ 2.65m、幅 4.00m を測る。底面の標高は 2.08～2.13m と、僅かに北から南へ向かって下る。断面形は凹レンズ形を呈する。上端幅 3.50m 以上、下端幅 1.30m、遺構確認面からの深さは 0.87m を測る。覆土：11 層に区分できる。底面直上の 11 層には明黄褐色シルトブロックが中量含まれ、人為的な埋め戻し層と考えられる。8 層は炭化物ブロックと焼土ブロックを多量に含み、瀬戸美濃産の鉄軸陶器スリ鉢や土器焙烙など多くの近世陶磁器が出土した（図版 3-7）。

遺物（第 27 図 第 9 表 図版 8）

出土状況：本遺構からは、全部で 167 点（2,846.5g）の遺物が出土した。それらのうち主体を占めるのは近世陶磁器であり、磁器 59 点（253.1g）、陶器 53 点（589.6g）、土器 24 点（946.9g）から構成される。このほか、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器 20 点（143.8g）や中世陶器 4 点（352.5g）、中国陶磁器 2 点（11.6g）、石製品 3 点（486.1g）、生産関連遺物（鉄滓）2 点（62.9g）が出土する。これらのうち近世陶磁器を中心に 13 点を図示した。1～4 は肥前染付磁器である。1 は飯磁器と推定される口縁部破片である。外面に雨降り文を描く。2 と 4 は中碗であり、2 の高台内側には「大明年製」銘が見られる。4 は所謂「くらわんか碗」である。3 は蓋付碗である。18 世紀後半と推定され、他の遺物の年代に比べて新しい年代である。5 は肥前産の青緑軸陶器碗である。内面底部を輪状に軸剥ぎする。6 は肥前産の灰軸陶器鉢で、内面底部を輪状に軸剥ぎする。5 と 6 は 17 世紀末～18 世紀初頭と推定される。7 は瀬戸美濃産の鉄軸陶器スリ鉢である。8 と 9 は共にかわらけ小皿である。速い回転口口成形の特徴から近世と推定される。10 は内耳をもつ底部平底



第 27 图 第 5 号沟迹出土遗物实测图 (SD05)

第9表 第5号溝跡出土遺物観察表

重量の「」は推定、「」は測存、「-」は不明、「計部不能

探検番号	出土遺構	種別	部位	法量 (cm) 口径 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	構成	色調	備考
27-1	SD05	染付磁器 (仏産)	口縁部	9.2)	5g	ロウロ成形。外面口縁部に溝彫り文。	色調：白色 胎土質：精 含有粒子：-	良	外面：灰白色 10YR8/1 内面：灰白色 10YR8/1	*肥前産 ・17世紀末～ 18世紀初め
8-1				-						
27-2	SD05	染付磁器 中腹	底面	-(3.8)	12g	ロウロ成形。削り出し高台。高台内側に一重彫線を施す。その内側に「大明年製」刻。	色調：白色 胎土質：精 含有粒子：-	良	外面：灰白色 10YR8/1 内面：灰白色 10YR8/1	*肥前産 ・17世紀末～ 18世紀初め
8-2				-						
27-3	SD05	染付磁器 蓋物	口縁 ～ 底面	9.8)	82g	ロウロ成形。削り出し高台。内外面胎動の後、口縁部と高台下端部を輪状動かし、外面に刻文。	色調：白色 胎土質：精 含有粒子：-	良	外面：灰白色 10YR8/1 内面：灰白色 10YR8/1	*肥前産 ・18世紀後半
8-3				5.7) (5.8)						
27-4	SD05	染付磁器 中腹	底面	-(4.0)	49g	ロウロ成形。削り出し高台。外面に刷目文。高台内側に一重彫線。	色調：白色 胎土質：精 含有粒子：-	良	外面：灰白色 10YR8/1 内面：灰白色 10YR8/1	*肥前産 ・くらむか崎 ・17世紀末～ 18世紀初め
8-4				-						
27-5	SD05	青磁鉢 陶器 小皿	底面	-(4.2)	29g	ロウロ成形。削り出し高台。内外面胎動の後、内面底面を輪状動かし。	色調：にぶい黄褐色 10YR7/3 胎土質：中々精 含有粒子：-	良	外面：浅灰色 5Y7/3 内面：明緑灰色 7.5GY7/1	*唐津産 ・17世紀末～ 18世紀初め
8-5				-						
27-6	SD05	灰胎 陶器 鉢	底面	-(7.0)	94g	ロウロ成形。削り出し高台。内外面胎動の後、内面底面を輪状動かし。	色調：灰白色 10YR8/2 胎土質：精 含有粒子：-	良	外面：淡灰色 2.5YR/3 内面：灰白色 2.5YR/2	*唐津産 ・17世紀末～ 18世紀初め
8-6				-						
27-7	SD05	灰胎 陶器 すり鉢	底面	-(14.0)	279g	ロウロ成形。底面左側半周を削り、内外面に磨き出し。磨き面長さ 13 本 / 42 mm 幅。内面磨き目三つ並列。	色調：灰白色 10YR8/2 胎土質：粗 含有粒子：砂粒中量	不良	外面：にぶい黄褐色 5YR4/3 内面：暗褐色 5YR3/4	*瀬戸産 ・18～19世紀
8-7				-						
27-8	SD05	かわらけ 小皿	口縁	13.2)	3g	ロウロ成形。	色調：にぶい黄褐色 7.5YR5/4 胎土質：中々精 含有粒子：砂粒少量	良	外面：にぶい黄褐色 10YR5/4 内面：にぶい黄褐色 10YR6/3	*近世
8-8				-						
27-9	SD05	かわらけ 小皿	底面	-(6.0)	7g	ロウロ成形。底面回転糸切り磨し。	色調：褐色 5YR7/6 胎土質：中々精 含有粒子：砂粒少量	良	外面：褐色 5YR7/6 内面：褐色 5YR7/8	*近世
8-9				-						
27-10	SD05	土源 磁器	口縁 ～ 底面	36.0)	813g	板状底面に胴部彫り付け。外面胴部上部にへう附りの上から指彫立彫。外面胴部中心～上部は回転ナゾ彫。内面体部～底面に指彫り付け。	色調：にぶい黄褐色 10YR7/3 胎土質：粗 含有粒子：砂粒多量	良	外面：黒褐色 10YR3/1 内面：暗灰色 10YR5/1	*18世紀代
8-10				5.5 (31.8)						
27-11	SD05	青磁 碗	胴部	-(-)	4g	ロウロ成形。内面に磨き文。外面にへう削りで磨き文。	色調：灰白色 10YR7/1 胎土質：精 含有粒子：-	良	外面：灰オリーブ色 5Y6/2 内面：灰白色 5Y7/2	*中国産 ・13世紀末
8-11				-						
27-12	SD05	青磁 碗	胴部	-(-)	8g	ロウロ成形。内面に磨き文。	色調：暗灰色 10YR6/1 胎土質：精 含有粒子：-	良	外面：灰オリーブ色 5Y5/2 内面：灰オリーブ色 5Y5/2	*中国産 ・13世紀末
8-12				-						

重量の「」は推定、「」は測存、「-」は不明、「計部不能

探検番号	出土遺構	種別	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
8-13	SD05	石製品 板碑片	113.5)	110.4)	12.4)	436g	緑磁片岩。一面に表面が現る。表面には刻字や刷文は見られない。

の土器焙烙である。18世紀代と推定される。11と12は共に中国龍泉窯系の青磁腕脚部破片である。共に軸下に櫛描文を刻む。また、板碑片が1点出土しており、図版8-13に示した。第4号溝跡出土資料と同一個体と思われる。

時期

本遺構から出土する近世陶磁器のうち、肥前染付磁器や肥前陶器は17世紀末～18世紀初頭と考えられる。土器焙烙は、埼玉県内や葛飾区での出土例から18世紀代と推定される。したがって本遺構の年代は、出土遺物から18世紀代と考えられる。

第6号溝跡—SD06

遺構（第28図）

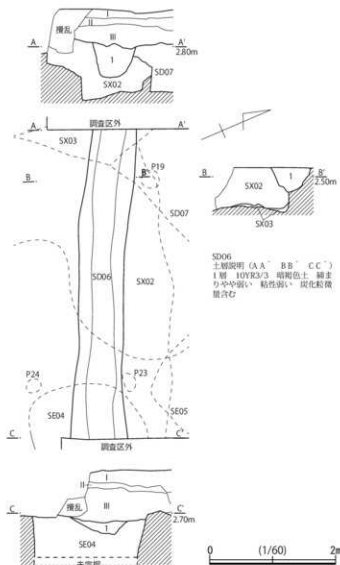
位置：2区D・E-3・4グリッド。重複関係：第3号周溝状遺構、第2号周溝状遺構、第7号溝跡、第4号井戸跡を切る。主軸方位：N-65°-Wを測り、調査地の南に隣接する中央通りと平行に走る。平面形・規模：調査区内では直線状に検出された。東西の両端が調査区外に延びる。調査区内では長さ4.92m、幅0.91mを測る。A-A'断面では断面形はU字形を呈するが、C-C'断面では浅い皿形を呈する。上端幅0.66～0.91m、下端幅0.32m、遺構確認面からの深さは0.21～0.53m、遺構確認面の標高は2.86mを測る。底面の標高は2.30～2.40mを測り、東から西へ向かって下る。覆土：覆土は単一層である。出土した近世陶磁器の接合率が他遺構に比べて高いことから、廃棄に伴う人為的な埋め戻し層であると考えられる。

遺物（第29図 第10表 図版9）

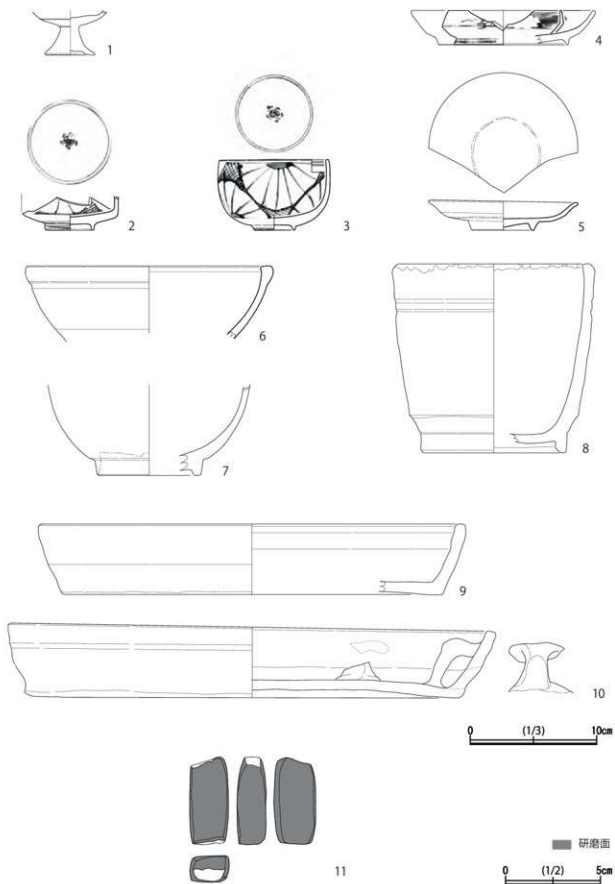
出土状況：本遺構からは、全部で65点（4,261.3g）の遺物が出土した。このうち大部分を占めるのは近世陶磁器であり、磁器10点（285.4g）、陶器22点（1042.0g）、土器21点（2,113.0g）から構成される。このほか、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器1点（20.6g）や近世の瓦8点（730.0g）、金属製品2点（48.4g）、石製品1点（21.9g）が出土する。これらのうち11点を図示した。1～4は肥前染付磁器である。1は仏飯器である。2は筒形碗である。3は小碗である。4は五寸皿である。5～8は近世陶器である。5は肥前産の灰釉陶器小皿である。6と7は瀬戸美濃産の灰釉陶器鉢である。8は瀬戸美濃産の鉄釉陶器中甕である。9と10は共に内耳を有する平底の土器焙烙である。18世紀代に比定される。11は石製品で砥石である。

時期

出土遺物の大部分を占める近世陶磁器の生産年代は17世紀末～18世紀代である。また、2点の土器焙烙は底部平底で内耳を有し、埼玉県内や葛飾区内での出土例から18世紀代に比定される。したがって、本遺構は出土遺物から18世紀代に帰属すると考えられる。



第28図 第6号溝跡実測図 (SD06)



第 29 图 第 6 号沟迹出土遗物实测图 (SD06)

第10表 第6号溝跡出土遺物観察表

法量の()は推定、|は残存、-は不明、計部不明

探査番号	出土遺構	種別	部位	法量(cm) 口径 高さ 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	構成	色調	備考
29-1	SD06	染付磁器 仏飯碗	底部	—	37g	ロウロ成。削り出し高台。高台内側の削り込み浅い。外面胴部下に二重の彫線。	色調：白色 胎土質：精 含有粒子：-	良	外面：灰白色 2.5GY8/1 内面：灰白色 2.5GY8/1	・肥前産
9-1				3.8						
29-2	SD06	染付磁器 小碗	底部	—	58g	ロウロ成。削り出し高台。半球形(V字)。内面底部に五弁花文。外面胴部に平梨文。	色調：白色 胎土質：精 含有粒子：-	良	外面：灰白色 10Y8/1 内面：明褐色 10GY8/1	・肥前産 ・18世紀後半
9-2				3.8						
29-3	SD06	染付磁器 小碗	口縁 ~ 底部	8.4	137g	ロウロ成。削り出し高台。半球形(V字)。内面底部に五弁花文。外面胴部に平梨文。	色調：白色 胎土質：精 含有粒子：-	良	外面：灰白色 10Y8/1 内面：灰白色 10Y8/1	・肥前産 ・18世紀後半
9-3				5.7 3.1						
29-4	SD06	染付磁器 小碗	口縁 ~ 底部	(14.4)	20g	ロウロ成。削り出し高台。丸形。途中(1-1B類)。内面胴部に雷輪、草文。外面胴部に草輪文。	色調：白色 胎土質：精 含有粒子：-	良	外面：灰白色 5Y7/1 内面：灰白色 5Y7/2	・肥前産 ・18世紀
9-4				(2.7) (10.0)						
29-5	SD06	灰胎 陶器 小碗	口縁 ~ 底部	(11.6)	73g	ロウロ成。削り出し高台。丸形。底長(1-A類)。内面底部に高台彫線。	色調：黄褐色 10YR6/1 胎土質：中々精 含有粒子：砂粒極少量	良	外面：灰オリーブ色 5Y6/2 内面：灰色 5Y6/1	・瀬戸美濃産 ・18世紀後半 ~19世紀前半
9-5				2.3 4.7						
29-6	SD06	灰胎 陶器 片口鉢	口縁部	(10.2)	73g	ロウロ成。削り出し高台。丸形(1類)。玉縁口縁。	色調：にぶい黄褐色 10YR7/4 胎土質：中々精 含有粒子：砂粒少量	良	外面：にぶい黄色 2.5Y6/3 内面：黄褐色 2.5Y5/3	・瀬戸美濃産 ・18世紀後半
9-6				—						
29-7	SD06	灰胎 陶器 片口鉢	底部	—	161g	ロウロ成。削り出し高台。丸形(1類)。	色調：黄褐色 2.5Y8/3 胎土質：中々精 含有粒子：砂粒少量	良	外面：にぶい黄色 2.5Y6/3 内面：黄褐色 2.5Y5/3	・瀬戸美濃産 ・18世紀後半
9-7				(7.8)						
29-8	SD06	灰胎 陶器 中盤	口縁 ~ 底部	(15.0)	455g	ロウロ成。削り出し高台。半胴形。浅め(雷輪)。	色調：にぶい黄褐色 10YR6/3 胎土質：粗 含有粒子：砂粒多量	良	外面：にぶい黄褐色 10YR4/3 内面：褐色 10YR4/4	・瀬戸美濃産 ・18世紀 ・灰灰土に 転用
9-8				(11.0)						
29-9	SD06	土器 磁器	口縁 ~ 底部	(34.0)	265g	板状底部に胴部彫付け。外面胴部下に凹へつ削り。外面胴部中位~上位は回転ナ字彫。	色調：黄褐色 10YR8/3 胎土質：粗 含有粒子：砂粒多量	良	外面：黄褐色 10YR3/2 内面：灰黄褐色 10YR6/2	・18世紀
10-1				(5.7) (30.0)						
29-10	SD06	土器 磁器	口縁 ~ 底部	(38.0)	1552g	板状底部に胴部彫付け。外面胴部下に凹へつ削り。外面胴部中位~上位は回転ナ字彫。内面底部~底部は凹目彫付。	色調：黄褐色 10YR4/1 胎土質：粗 含有粒子：砂粒多量	良	外面：明褐色 10YR6/6 内面：にぶい黄褐色 10YR6/3	・底部~胴部 に焼成 ・18世紀
9-9				5.6 30.6						

法量の()は推定、|は残存、-は不明、計部不明

探査番号	出土遺構	種別	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
29-11	SD06	石製品 瓦石	[4.6]	2.0	1.4	22g	凝灰岩製。色調：黄褐色 10YR8/3。持破石。立方体を呈し、欠損による端面の一面を除く各面が研磨面。
9-10							

第7号溝跡—SD07

遺構(第30図 図版3-8)

位置：2区D・E・F-3グリッド。主軸方位：N-68°-Wを測る。調査区の南に隣接する中央通りと平行する。重複関係：第2号周溝状遺構、第3号周溝状遺構、第5号井戸跡、第14・19号ピットを切り、第6号溝跡に切られる。調査区内ではほぼ直線状に検出され、東西両端は調査区外へ延びる。断面形は、A-A'断面では逆台形を呈するが、B-B'断面では不整形を呈する。調査区内では長さ4.90m、上端幅1.38~1.98m、下端幅1.08~1.50m、遺構確認面の標高2.76m、遺構確認面からの深さ0.60mを測る。覆土：3層に区分できる。下層の2層と3層は明黄褐色シルトブロックを主体とするため、人為的な埋め戻し層と考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは全部で5点(57.0g)の遺物が出土した。すべて近世に帰属するもので、磁器1点(9.7g)、陶器2点(6.2g)、土器1点(6.0g)、瓦1点(35.1g)から構成される。いずれも

小破片のため図示できなかった。

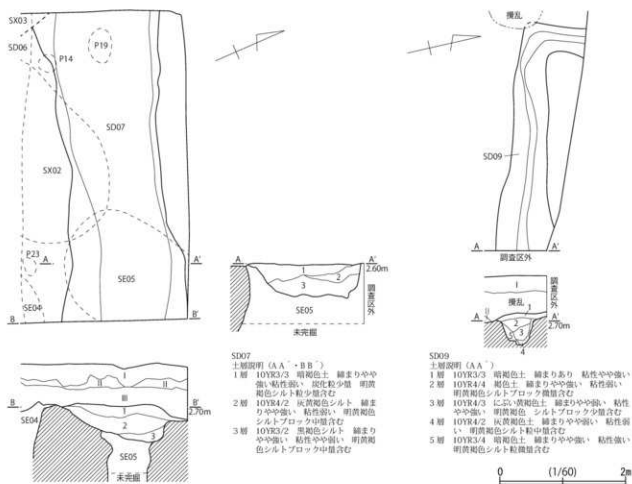
時期

出土遺物は全て近世に帰属する。また18世紀代と推定される第6号溝跡を切ることから、本遺構は近世期においても幕末期に近い時期の所産と考えられる。

第9号溝跡—SD09

遺構(第30図)

位置:3区C・D-1・2グリッド。主軸方位:N-69°-Wを測り、調査区の南側に隣接する中央通りと平行あるいは直交する。平面形・規模:断面形が漏斗状を呈する溝状遺構である。3区東壁から西方向に3.60m延び、北方向に直角に屈曲して調査区外に延びる。調査区内では、長さ3.60m、幅1.00m、遺構確認面の標高2.82m、遺構確認面からの深さ0.49mを測る。底面の標高は2.17~2.29mを測り、東から西へ向かって下る。断面形は下部がU字形を呈し、上方において壁面が外方に屈曲し、緩やかな傾きで立ち上がる。上端幅0.93m以上、下端幅0.30mを測る。覆土:5層に区分できる。4層堆積後に溝の掘り直しが行われ、3~1層が堆積したと考えられる。



第30図 第7・9号溝跡実測図(SD07・SD09)

遺物

出土状況：本遺構からは全部で2点(40.6g)の遺物が出土した。近世陶器1点(2.6g)と石製品1点(38.0g)である。いずれも小破片のため図示できなかった。

時期

近世陶器の出土から、本遺構は近世期の所産と推定される。

2 井戸跡

第3号井戸跡—SE03

遺構(第31図)

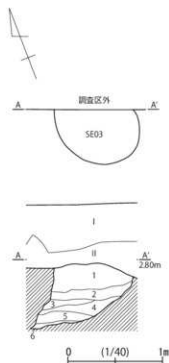
位置：2区F-4グリッド。平面形・規模：本遺構の北側は調査区外に広がるが、遺構確認面ではほぼ円形を呈すると思われる。調査区内では径0.88m、遺構確認面の標高2.76m、遺構確認面からの深さ0.70mを測る。断面形は不整形を呈する。西側壁面は下位が崩落によりオーバーハングするのに対して、東側壁面は緩やかな傾きで下り西側壁面に繋がる。覆土：6層に区分できる。いずれも自然堆積層である。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

年代

遺物は出土していないが、本遺構の確認面上にはⅡ層が堆積し、弥生時代から近世の包含層であるⅢ層よりも新しいと考えられることから、近世期の所産と推定される。



SE03
土層説明(A-A')

1層	10YR3/3	暗褐色土	締まり非常に強い
		粘性ややあり	炭化粒堆積含む
2層	10YR4/3	赤い黄褐色土	締まり弱い
			粘性弱い
3層	10YR4/2	灰黄褐色シルト	締まり強い
			粘性強い
4層	10YR5/1	暗灰色シルト	締まり強い
			粘性強い
5層	10YR4/1	暗灰色シルト	締まりややあり
			粘性強い
6層	10YR2/3	黒褐色シルト	締まり強い
			粘性強い

第31図 第3号井戸跡実測図(SE03)

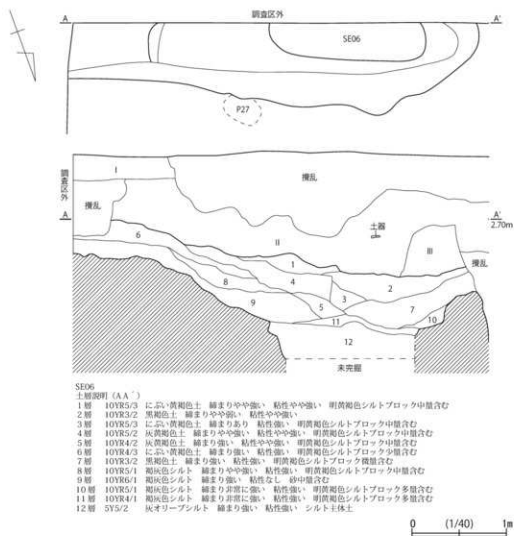
第6号井戸跡—SE06

遺構(第32図 図版4-1・2)

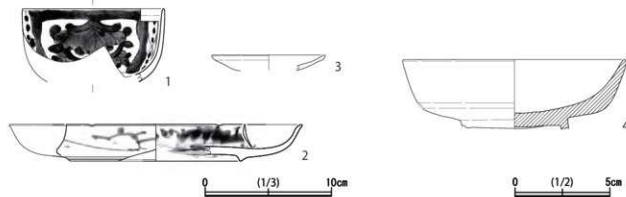
位置：3区C・D-2グリッド。重複関係：第27号ピットを切る。平面形・規模：本遺構の南側は調査区外に広がる。また、西側は攪乱に切られる。遺構確認面の標高は2.70mを測る。湧水のため遺構確認面から1.46mの深さまで調査を行い、以下は未調査とした。本遺構は上面では深さ0.40m前後の溝状を呈する。溝状部分の底面は起伏が多く西側に向かって下る。溝状部分西端の遺構確認面下1.08mで、東西長1.60mを測る隅丸方形と推定される掘り込みを有し、壁面は垂下する。溝状部分の主軸方向はN-70°-Wを測り、調査区の南に隣接する中央通りと平行である。覆土：調査では12層の堆積を確認した。9層・8層・6層・5層は東側の溝状部分からの土砂の流れ込みによる堆積層である。特に溝状部分の底面直上に堆積する9層は砂を中量含むことから、水流に伴う堆積層である可能性がある。

遺物(第33図 第11表 図版10-4~7)

出土状況：本遺構からは全部で61点(1,809.0g)の遺物が出土した。このうち主体を占めるのは



第32図 第6号井戸跡実測図 (SE06)



第33図 第6号井戸跡出土遺物実測図 (SE06)

近世期の遺物で、磁器 16 点 (224.2g)、陶器 16 点 (630.0g)、土器 12 点 (511.8g)、瓦 3 点 (124.2g) から構成される。この他、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土師器 11 点 (66.7g) と近世の木製品 2 点 (196.7g)、石製品 1 点 (55.4g) が出土する。これらのうち 4 点を図示した。1 は肥前染付磁器蓋物の身部分破片である。焼継痕が見られる。19 世紀代と推定される。2 は肥前染付磁器中皿である。18 世紀代と推定される。4 は漆器碗である。

第11表 第6号井戸跡出土遺物観察表

法量の()は推定、[]は測存、―は不明・計測不能

検出番号	出土遺構	種別	部位	法量(φcm) 口径 器高 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	構成	色調	備考
33-1	SE06	染付 磁器 煎物	口縁部	11.2 —	63g	ロクロ成形。口縁部輪削ぎ。外面 胴部に移動蓮花文。	色調：白色 胎土質：精 含有粒子：—	良	外面：灰白色 10Y8/1 内面：灰白色 10Y8/1	・肥前産 ・19世紀後半 ・焼跡類
10-4										
33-2	SE06	染付 磁器 中皿	口縁 — 底部	(23.2) (2.9) (13.6)	63g	ロクロ成形。削り出し高台。桜花 文口縁部。内面に草花文、外面磨 漆文。	色調：白色 胎土質：精 含有粒子：—	良	外面：灰白色 10Y8/1 内面：灰白色 10Y8/1	・肥前産 ・18世紀後半 →19世紀前半
10-5										
33-3	SE06	かわらけ 小皿	口縁部	(8.8) —	5g	ロクロ成形。口縁部は僅かに肥厚 して丸くおさまる。	色調：10YR8/4 浅黄褐色 胎土質：精 含有粒子：砂粒少量	良	外面：にぶい褐色 7.5YR7/4 内面：にぶい褐色 7.5YR7/4	・近世
10-6										

法量の()は推定、[]は測存、―は不明・計測不能

検出番号	出土遺構	種別	口径(φcm)	高さ(cm)	底径(φcm)	重量(g)	備考
33-4	SE06	漆器 椀	(11.8)	[3.7]	—	90g	ロクロ成形。器面色調：暗赤褐色 2.5YR3/4。赤漆。薄く垂下する高台から体部は横方向に延び、体部 中位で上方に折曲。口縁部は高線的に立ち上がり、端部は丸く収める。
10-7							

時期

出土遺物の大部分は18～19世紀代の近世陶磁器である。したがって、本遺構は出土遺物から18～19世紀代の所産と考えられる。

3 土坑

第3号土坑—SK03

遺構(第34図)

位置：2区D-3・4グリッド。平面形・規模：平面形は隅丸方形を呈する。長さ0.80m、幅0.58m、遺構確認面の標高2.74m、遺構確認面からの深さは0.14mを測る。断面形は皿形を呈し、底面は若干の起伏を持つ。主軸方位：N-23°-Eを測る。第5号溝跡と平行し、第6号溝跡や第7号溝跡と直交する。覆土：暗褐色シルトを主体とする単一層で、自然堆積層と思われる。

遺物

出土状況：本遺構からは近世期の瓦1点(86.5g)が出土した。小破片のため図示できなかった。

年代

出土した近世期の瓦と周辺の近世期の遺構との配置関係から、本遺構は近世期の所産と考えられる。

第5号土坑—SK05

遺構(第34図)

位置：2区F-5グリッド。平面形・規模：本遺構の南側と東側は調査区外に広がる。遺構確認面での平面形は東西方向に長軸を持つ楕円形と考えられる。調査区内では長さ0.69m、幅0.32m、遺構確認面の標高3.00m、遺構確認面からの深さは0.43mを測る。断面形は不整形を呈し、調査区東壁際に掘り込みを有し、西側に平坦部を形成し壁面は緩やかな傾きで立ち上がる。主軸方位：N-68°-Wを測る。覆土：4層に区分できる。いずれの層も自然堆積層と考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは全部で3点（59.5g）の遺物が出土した。近世期の瓦2点（55.7g）と金属製品1点（3.8g）である。いずれも小破片のため図示できなかった。

年代

出土した近世期の瓦から、本遺構は近世期の所産と推定される。

第6号土坑－SK06

遺構（第34図）

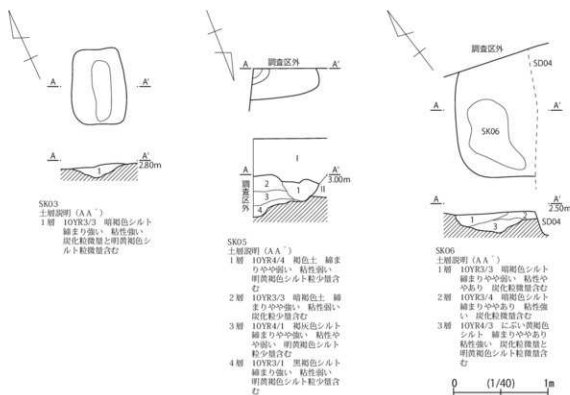
位置：2区B・C－3グリッド。重複関係：第4号溝跡に切られる。平面形・規模：本遺構の北側は調査区外に広がり、東側は第4号溝跡と重複する。遺構確認面での平面形は隅丸方形を呈すると思われる。調査区内では長さ1.24m、幅0.85m、遺構確認面の標高2.42m、遺構確認面からの深さは0.21mを測る。断面形は皿形を呈する。底面は南西部分が深く、緩やかな傾きで立ち上がる。東部分に平坦部を形成する。主軸方位：N－30°－Eを測る。覆土：3層に区分できる。いずれも自然堆積層と思われる。

遺物

出土状況：本遺構から出土した遺物は近世陶器1点（6.4g）である。小破片のため図示できなかった。

年代

出土した近世陶器から、本遺構は近世期の所産と推定される。



第34図 第3・5・6号土坑実測図 (SK03・SK05・SK06)

4 ビット

遺構 (第 35 図)

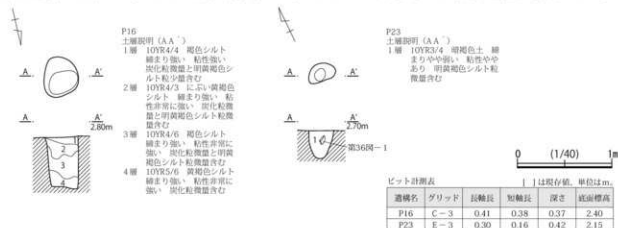
本調査区において、近世遺物が出土した第 16 号ビットと第 23 号ビットを近世期の遺構と推定した。2 基のビットは形状や覆土の特徴が異なる。2 区 C-3 グリッドに位置する第 16 号ビットは平面形が不整形で、断面形が壁面が垂直となる凹字形を呈する。覆土は 4 層に区分でき、いずれも褐色シルトを主体とする。これに対して、2 区 E-3 グリッドに位置する第 23 号ビットは平面形が楕円形で、断面形は U 字形を呈する。覆土は暗褐色土の単一層である。

遺物 (第 36 図 第 12 表 図版 11-1)

出土状況：第 16 号ビットからは近世陶器 1 点 (3.6g) が出土した。第 23 号ビットからは近世陶器 1 点 (80.4g) が出土した。これらのうち、第 23 号ビットから出土した近世陶器を図示した。1 は瀬戸美濃産の所謂「雑巾手」と呼ばれる平形碗である。灰釉下に刷毛目により化粧土を塗る。18 世紀第 4 四半期と推定される。

時期

出土遺物から第 16 号ビットは近世期、第 23 号ビットは 18 世紀第 4 四半期の所産と推定される。



第 35 図 第 16・23 号ビット実測図 (P16・P23)



第 36 図 第 23 号ビット出土遺物実測図 (P23)

第 12 表 第 23 号ビット出土遺物観察表

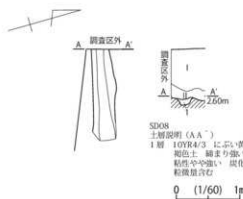
発掘番号	出土遺構	種別・形状	部位	法量 (cm)	重量	成用・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
36-1	P23	刷毛目陶碗	口縁部	(15.0)	3.6g	平形碗。所謂「雑巾手」ロクロ成形。回転削り出し製法。内外面に化粧土を塗布し、その上から灰釉を塗す。	色調：黄灰色 10YR6/1 胎土質：中硬粘 含有粒子：砂粒少量	良	外面：オリーブ黄色 5Y6/4 内面：灰オリーブ色 5Y6/2	・瀬戸美濃産 ・18 世紀第 4 四半期

注: 法量の () は推定, [] は現存, [] は不明・計測不能

第4節 時期不明遺構と遺構外出土遺物

1 溝跡 (第37図)

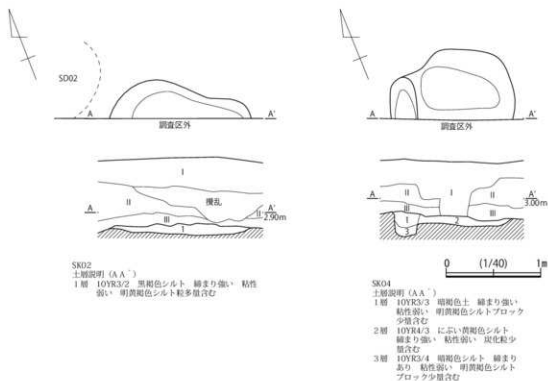
時期を特定できない溝跡1条を検出した。第8号溝跡は3区B-1・2グリッドに位置する。調査区内では直線状を呈する。主軸方位はN-79°-Wを測る。西側は調査区外に延び、東側は攪乱により削平されている。調査区内では長さ1.40m、幅0.40m、遺構確認面の標高2.54m、遺構確認面からの深さ0.09mを測る。本遺構から遺物は出土せず、他遺構との重複関係も見られないことから時期不明とした。



第37図 第8号溝跡実測図 (SD08)

2 土坑 (第38図)

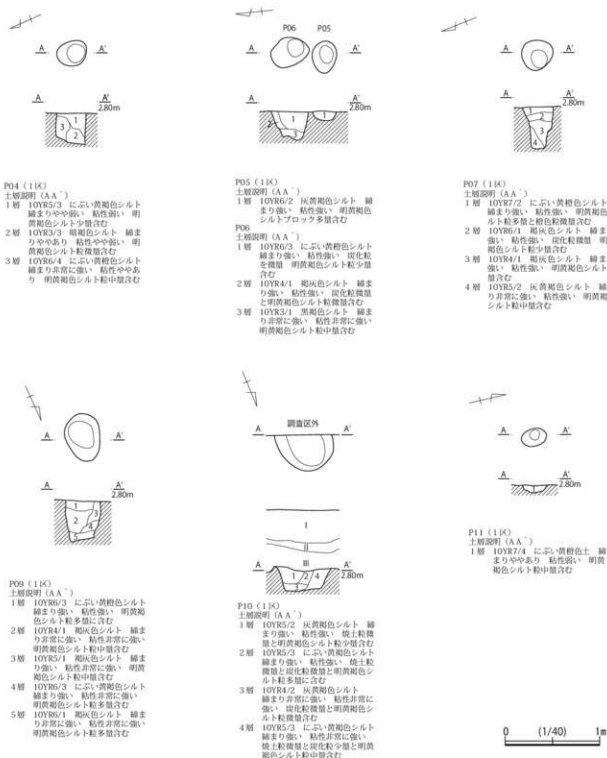
時期を特定できない土坑2基を検出した。第2号土坑は1区C・D-6グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、南側は調査区外に広がる。調査区内では長さ1.48m、幅0.54m、遺構確認面の標高2.78m、遺構確認面からの深さは0.12mを測る。断面形は皿形で底面は平坦である。第4号土坑は2区C・D-4グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、南側は調査区外に広がる。調査区内では長さ1.28m、幅0.76m、遺構確認面の標高2.76m、遺構確認面からの深さ0.26mを測る。断面形は浅い皿形で西側に長さ0.44m以上、幅0.28mの掘り込みを有する。いずれの遺構からも遺物は出土せず、他遺構との重複関係も見られないことから時期不明とした。



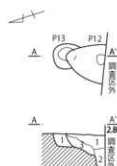
第38図 第2・4号土坑実測図 (SK02・SK04)

3 ビット (第39～41図 図版4-3・4)

時期不明のビット21基を検出した。これらのビットは、一部を除き掘立柱建物跡や柵列跡を想定できる配置が見られず、覆土から遺物が出土しないことから時期の特定は困難である。第15号ビットと第17号ビットは、共に平面形が隅丸方形を呈し、断面形は階段状の凹形を呈する。両ビット間間は1.75m(約1間)の距離をもつことから、掘立柱建物跡を構成していた可能性がある。

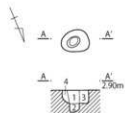


第39図 時期不明ビット実測図(1)

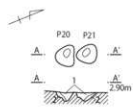


P12 (1区)
土層説明 (AA')
1層 IOYR7/1 灰白色シルト 締まり強い、粘性強い、明黄褐色シルトブロック多量に含む
2層 IOYR4/1 灰褐色シルト 締まり非常に強い、粘性強い、明黄褐色シルトブロック中量含む
3層 IOYR4/2 灰黄褐色シルト 締まり強い、粘性非常に強い、明黄褐色シルト粒少量含む

P13 (1区)
土層説明 (AA')
1層 IOYR6/1 灰褐色シルト 締まり非常に強い、粘性非常に強い、明黄褐色シルト粒少量含む

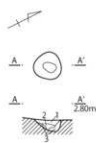


P17 (2区)
土層説明 (AA')
1層 IOYR4/3 にぶい黄褐色シルト 締まり強い、粘性強い、明黄褐色シルト粒微量含む
2層 IOYR3/3 暗褐色シルト 締まり非常に強い、粘性強い
3層 IOYR4/4 褐色シルト 締まりややあり、粘性やや弱い、明黄褐色シルト粒中量含む
4層 IOYR4/6 褐色シルト 締まりややあり、粘性やや弱い、明黄褐色シルト粒中量含む

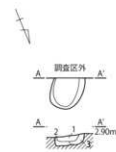


P20 (2区)
土層説明 (AA')
1層 IOYR4/4 褐色シルト 締まりややあり、粘性非常に強い、炭化粒微量含む
2層 IOYR3/4 暗褐色シルト 締まり強い、粘性非常に強い、炭化粒微量含む

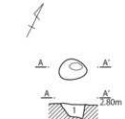
P21 (2区)
土層説明 (AA')
1層 IOYR4/3 にぶい黄褐色土 締まりややあり、粘性やや弱い、炭化粒微量含む
2層 IOYR4/6 褐色シルト 締まりややあり、粘性強い



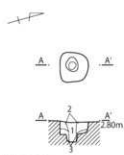
P14 (2区)
土層説明 (AA')
1層 IOYR3/4 暗褐色シルト 締まり強い、粘性強い、炭化粒微量と明黄褐色シルト粒微量含む
2層 IOYR4/3 にぶい黄褐色シルト 締まり非常に強い、粘性強い、炭化粒微量と明黄褐色シルト粒少量含む
3層 IOYR4/6 褐色シルト 締まり強い、粘性非常に強い、明黄褐色シルト粒少量含む



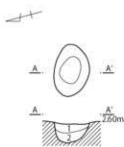
P18 (2区)
土層説明 (AA')
1層 IOYR4/3 にぶい黄褐色シルト 締まりややあり、粘性やや弱い、明黄褐色シルト粒中量含む
2層 IOYR6/6 明黄褐色シルト 締まり非常に強い、粘性強い、明黄褐色シルト粒多量含む
3層 IOYR5/6 黄褐色シルト 締まり非常に強い、粘性強い、明黄褐色シルト粒多量含む



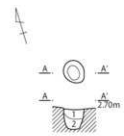
P22 (2区)
土層説明 (AA')
1層 IOYR3/3 暗褐色土 締まり強い、粘性やや弱い、明黄褐色シルト粒微量含む



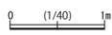
P15 (2区)
土層説明 (AA')
1層 IOYR4/4 褐色シルト 締まりややあり、粘性やや弱い、炭化粒微量と明黄褐色シルト粒微量含む
2層 IOYR4/3 にぶい黄褐色シルト 締まりやや弱い、粘性やや弱い、明黄褐色シルト粒中量含む
3層 IOYR5/4 にぶい黄褐色シルト 締まり強い、粘性やや弱い、炭化粒微量と明黄褐色シルト粒微量含む



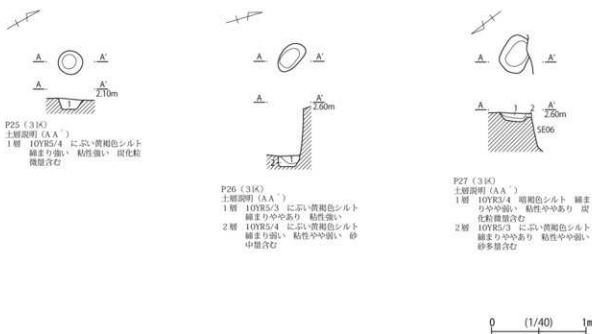
P19 (2区)
土層説明 (AA')
1層 IOYR4/4 褐色シルト 締まりややあり、粘性非常に強い、炭化粒微量含む
2層 IOYR3/4 暗褐色シルト 締まり強い、粘性非常に強い、炭化粒微量含む



P24 (2区)
土層説明 (AA')
1層 IOYR3/3 暗褐色土 締まりややあり、粘性ややあり、炭化粒微量含む
2層 IOYR3/4 暗褐色シルト 締まりややあり、粘性非常に強い、炭化粒微量含む



第 40 図 時期不明ビット実測図 (2)



ピット計測表

遺構名	グリッド	長軸長	短軸長	深さ	底面標高	備考
P04	E-7	0.32	0.26	0.32	2.31	
P05	D-7	0.34	0.26	0.11	2.54	
P06	D-6・7	0.42	0.30	0.31	2.37	
P07	C-6	0.52	0.51	0.43	2.25	
P09	B-5・6	0.37	0.37	0.49	2.18	
P10	A-5・6	0.62	[0.38]	0.21	2.57	
P11	A-5	0.27	0.18	0.10	2.62	
P12	D-7	0.56	[0.41]	0.41	2.27	
P13	D-6・7	[0.28]	0.27	0.19	2.49	
P14	D-3	0.29	0.29	0.14	2.48	

[]は取存値。単位はm。

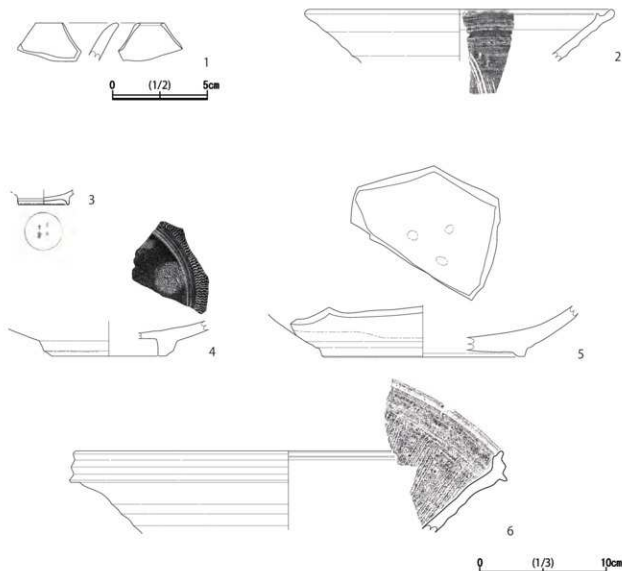
遺構名	グリッド	長軸長	短軸長	深さ	底面標高	備考
P15	C-3・4	0.31	0.30	0.25	2.50	P17との間1.75m
P17	C-3	0.29	0.24	0.26	2.52	P15との間1.75m
P18	C-4	[0.33]	0.34	0.14	2.69	
P19	D-E-3	0.55	0.38	0.22	1.74	
P20	C-3・4	0.23	0.22	0.11	2.67	
P21	C-3	0.21	0.20	0.10	2.67	
P22	D-3	0.27	0.22	0.16	2.56	
P24	E-4	0.25	0.21	0.23	2.36	
P25	B-1	0.26	0.25	0.13	1.87	
P26	B-1	0.35	0.21	0.16	1.85	
P27	C・D-2	0.40	0.28	0.10	2.36	

第41図 時期不明ピット実測図(3)

4 遺構外出土遺物 (第42図 第13表 図版11-2~7)

本調査区からは、遺構外から89点(1786.5g)の遺物が出土した。弥生時代後期後半~古墳時代前期初頭の土師器17点(106.3g)、中世陶器2点(33.3g)、近世陶磁器58点(1079.1g)、瓦4点(194.3g)、中国陶磁器1点(5.4g)、金属製品4点(295.9g)、石製品2点(19.6g)、生産関連遺物(鉄滓)1点(52.6g)である。これらのうち、中国陶磁器1点と中世陶器1点、近世陶磁器4点を図示した。

1は中国青磁碗である。口縁は外反し、内外面無文である。中国浙江省竜泉窯で13~14世紀に生産されたと推定される。3区出土。2は瀬戸美濃産の鉄釉陶器スリ鉢である。16世紀。1区出土。3~6は近世陶磁器である。3は肥前染付磁器の小碗で、高台内側に「大明年製」を記す。18世紀代。2区出土。2は肥前産の象嵌灰釉陶器の大鉢である。17世紀後半~18世紀前半。3区出土。3は瀬戸美濃産の灰釉陶器コネ鉢である。2区出土。4は丹波産の無釉陶器スリ鉢である。17世紀末~18世紀初頭。2区出土。



第 42 図 遺構外出土遺物実測図

第 13 表 遺構外出土遺物観察表

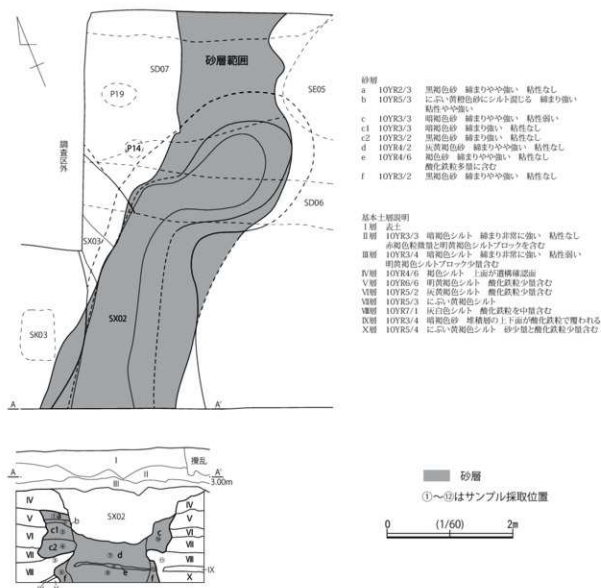
注：() は推定、| は推存、— は不明、計数不能

検出番号	出土調査区	種類・器種	部位	法量 (cm) 口径 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
42-1	1区	青磁碗	口縁部	—	5g	ロウロ成形、外反口縁、内外面無文。	色調：灰黄褐色 10YR6/2 胎土質：精 含有粒子：—	良	外面：暗オリーブ色 5Y4/4 内面：暗オリーブ色 5Y4/4	・中野地蔵堂産 ・13～14世紀
42-2	1区	鉄胎陶器 スリ鉢	口縁部	(24.4)	33g	ロウロ成形、内面口縁部下に突帯部。磨目歯数5本以上、21mm以上。	色調：灰白色 10YR8/2 胎土質：中々粗 含有粒子：—	良	外面：黄褐色 10YR5/6 内面：にぶい黄褐色 10YR5/4	・瀬戸美濃産 ・15世紀
42-3	2区	染付磁器 小碗	底部	—	11g	ロウロ成形、削り出し高台。高台内側に一重断線を巡らせ、その内側に「大明年製」記。	色調：白色 胎土質：精 含有粒子：—	良	外面：灰白色 10YR8/1 内面：灰白色 10YR8/1	・肥前産 ・18世紀代
42-4	3区	鉄胎 象嵌 刷毛目 大鉢	底部	— (9.0)	62g	ロウロ成形、削り出し高台。丸形底縁(1-E類)。内面底部に白跡、内面に白泥で象嵌文。外面胴部に鉄胎を刷毛目状工具で施布。	色調：にぶい赤褐色 5YR5/4 胎土質：中々粗 含有粒子：砂粒少量	良	外面：黒褐色 10YR2/2 内面：にぶい黄褐色 10YR5/3	・肥前産 ・三路手 ・17世紀後半～18世紀前半
42-5	2区	鉄胎陶器 コネ鉢	底部	— (16.0)	203g	ロウロ成形、削り出し高台。内面底部に白跡。	色調：浅黄褐色 10YR8/3 胎土質：粗 含有粒子：砂粒多量	良	外面：浅黄色 2.5Y7/4 内面：にぶい黄色 2.5Y6/4	・瀬戸美濃産 ・近世
42-6	2区	無胎陶器 スリ鉢	口縁部	(34.0)	135g	ロウロ成形、外面口縁部に突帯部形成。磨目歯数6本/18mm。	色調：灰白色 10YR7/1 胎土質：中々粗 含有粒子：砂粒中量	良	外面：にぶい黄褐色 10YR5/4 内面：にぶい黄褐色 10YR5/3	・丹波産 ・17世紀末～18世紀初
11-7				—						

第5節 第2号周溝状遺構直下に確認された砂層

1 砂層 (第43図 図版4-5)

位置：2区D・E-3・4グリッド。重複関係：第2号周溝状遺構、第3号周溝状遺構、第5号井戸跡、第7号溝跡に切られる。平面形・規模：第2号周溝状遺構の調査時に検出された。遺構確認面の標高2.46mを測る。調査では、砂層が同遺構の下位の遺構覆土である可能性を想定して掘削を行った。しかし、砂層から遺物は出土せず、下位においては砂層に含有物も含まれないために、自然堆積層と判断した。調査は、湧水が見られた確認面から1.14mの深さまで行った。砂層は第2号周溝状遺構の調査区南壁から北東方向に帯状に延び、第2号周溝状遺構の端部において僅かに北に屈曲し、調査区北壁に至る。南北方向には調査区外に延びる。調査区内では長さ6.60m、幅1.47～2.07mを測る。上端幅2.34m、調査深度下限では幅1.59mを測る。断面形は不整形を呈するが、砂層の分層



第43図 第2号周溝状遺構直下の砂層の堆積状況とその分布図

に基づけば、下位では d 層にみられように壁面垂直の凹形を呈し、上位で a～c 層が加わり、断面形が壁面外傾の凹形を呈する。主軸方位：N-38°-E を測る。堆積状況：砂層は、その色調と砂質、含有物の特徴から 6 層に区分できた。砂層の中央部に堆積する d 層や e 層は灰黄褐色や褐色と明るい色調であるのに対して、縁辺部に堆積する a～c 層、f 層は暗褐色～黒褐色を呈し暗い色調である。砂層各層と隣接するシルト主体の自然堆積層の一部において、サンプルを採取した。採取地点は断面図に①～⑫と記した。

第4章 まとめ

今回の発掘調査では、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構5基、溝跡1条、土坑1基、ピット4基、中世の溝跡1条、井戸跡4基、土坑1基、近世以降の溝跡5条、井戸跡2基、土坑3基、ピット2基、そして時期不明の溝跡1条、土坑2基、ピット21基を検出した。

以下に時代ごとに今回の発掘調査の成果について述べる。

1 弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭

弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の遺構は、周溝状遺構5基、溝跡1条、土坑1基、ピット4基である。

鍛冶谷・新田口遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期に形成された低地性の集落遺跡として全国にその名が知られている。これらの中でも過去9回に渡る発掘調査によって、検出総数113基を数える周溝状遺構は、本遺跡を特徴づける遺構であると言える。

周溝状遺構は、今回の調査で検出されたものを含めると、本遺跡においては118基を数えることとなる。これらは、近年その性格について検討が進められており、これまで「方形周溝墓」として一括して報告されていたものの中に「周溝持建物」が相当数存在するとの指摘がなされている。また、「周溝持建物」については、その構造と検出痕跡から、①伏屋式竪穴建物、②伏屋式平地建物、③高床の掘立柱建物、④壁立式平地建物の4種類が存在するとの想定がなされている（福田2014）。

今回検出した周溝状遺構は、いずれも部分的な検出であったため、遺構覆土や出土遺物、検出部形状から、周溝状遺構であると判断したものである。したがって、全体の形状を把握できたものがないことから、各周溝状遺構の性格や機能について言及することは困難である。今回の調査で検出した周溝状遺構の内、比較的全体の形状を捉えることができた第2・3・4号周溝状遺構の概要を以下に記す。

第2号周溝状遺構は、主軸方位を南西-北東とする円形に近い隅丸方形形状を呈するものと考えられる。2区南壁断面で確認した周溝の最大幅は約2.5m、深さは約0.9mを測ったため、周溝状遺構の中でも鍛冶谷・新田口遺跡事業団調査「第7号方形周溝墓」（西口ほか1986）や南原遺跡第9次調査「第3号方形周溝墓」（早川ほか2010）にみられる、全長が20mを超える大規模なものを想定して調査を行った。しかしながら、周溝南側延長部を1区において確認することはできず、結果としては当初想定していたものよりも小規模な周溝状遺構であることが判明した。今回の検出部が周溝状遺構北西部の一端にあり、また、南側及び東側に続く周溝が調査区外に所在すると仮定すると、本遺構は最大でも12m程度の規模であったと推定できる。周溝端部からは、遺物がややまとまって出土したが（図版1-5）、この出土状況は他の周溝状遺構の遺物出土状況と類似するものである。一方、本遺構で特筆すべきは、周溝の北東辺に開口部を持つことである。これまで戸田市域で確認された周溝状遺構は150基以上を数えるが、開口部を北側にのみ持つ事例は少ない（岩井ほか2013）。周溝に複数の開口部を有する事例はこれまでも検出されているため、本遺構は調査区外に複数方向の開口部を有するものである可能性も考えられる。

第3号周溝状遺構は、北東～南東辺の一部と北西辺の一部を確認した。他の遺構と重複するため、外形プランを把握できた箇所は北東部の一部分のみであるが、推定全長は7.5m程であったと考えられる。遺構確認時に周溝の内側でピット群を確認したため、鍛冶谷・新田口遺跡第5次調査「第1号方形周溝墓」（小島1990）類似の「周溝持掘立柱建物」の可能性を視野に入れて調査を行った。検出したピット・土坑を精査したところ、第15～17号ピット及び第3号土坑は、出土遺物（近世陶器）及び隅丸方形を呈する遺構形状（図版4-3・4）から中世・近世に帰属するものと考えられ、周溝状遺構に付随するものではない可能性が高い。また、第18・20～22号ピット、第4号土坑については帰属時期が不明であるが、その配置及び周溝との関係性が不明瞭であることから、本遺構に付随するものであるかどうかは不明である。

第4号周溝状遺構は、北東辺と角部の一部を確認した。形状は主軸方位を南西～北東とする方形に近い隅丸方形であると考えられる。また、1区からは当該期の所産である第1号土坑を検出した。一部分の検出であったため、単独の土坑として報告したが、平面位置からも第4号周溝状遺構の南西辺の一部であった可能性が考えられる。第1号土坑が第4号周溝状遺構の一部であったと仮定すると、本遺構の全長は約9.0mを測ることとなる。

なお、本報告では溝跡として報告したが、第1号溝跡についても周溝状遺構の一部であった可能性があることを指摘しておく。

周溝状遺構は、外來系土器の出土や弥生時代後期後半における急激な検出事例の増加から、これらの遺構が形成された背景に、人の移住や建物形式の移入等があったと考えられている。今回の調査では、これを検証する十分な証拠を検出することはできなかったが、低地遺跡を特徴づける遺構を多数検出できたことは大きな成果であると言える。

2 中世

中世の遺構は、溝跡1条、井戸跡4基、土坑1基である。

第3号溝跡は1区において東西方向に弧状に検出した。本遺構東側は、遺構底面が若干の起伏をもちながらも東から西にかけて緩やかな傾斜を持ち、第2号井戸跡と接続する。また、遺構底面では水流に起因すると考えられる砂粒を多量に含む堆積層を確認したことから、第2号井戸跡へ向けて排水する施設であったと考えられる。本遺構で特筆すべきは、第2号井戸跡との境界部で検出した2つの堰の存在である。この堰は、東から砂泥と共に流れ込む水の上澄みのみを井戸へ流し込むために設けられた施設であったと考えられる。類例は寡聞にして知らないが、標高が低く水はげが悪い低地ならではの、特徴的な施設であると考えられる。

井戸跡は1区で2基、2区で2基の計4基を検出した。近世に帰属する第3・6号井戸跡を含め、各調査区の中央から東寄りに集中して分布するという傾向を看取できる。第2章第1節で述べたように、鍛冶谷・新田口遺跡は東方から谷が入り組むC字状の自然堤防上に立地しており、本調査区も東側から入り込む谷に向けて、南東に向かって緩やかな傾斜を持つ。今回の調査で検出された井戸跡は、自然堤防上でもより谷に近く、地下水水位に容易にたどり着ける場所に造られたものとする。第2号井戸跡については、先述したように、第3号溝跡と関連して機能していた排水施設であったと考えら

れる。本遺構は湧水点以下まで掘り込まれていることから、取水の用途にも使用された可能性があるため「井戸跡」として報告したが、中世段階においては現代でいう“マンホール”的な役割を担っていた可能性が高いと考える。

今回検出した遺構の中で最も大きな規模を有するものに、第7号土坑がある。第7号土坑は、第3号溝跡及び第2号井戸跡埋没後に形成されたことが明らかであることから、排水施設であった第3号溝跡・第2号井戸跡が機能しなくなった後、何らかの意図のもと掘削、使用されたものであると考える。今回の調査では、本遺構の性格を特定する資料を得ることは出来なかったが、断面形状が築葉研形を呈することから“堀”として掘削された可能性も考えられる。しかしながら、北側及び南側の延長部が不明であり、また平面プランが不整形であることから、暫定的に「土坑」として報告した。

3 近世以降

近世以降の遺構は、溝跡5条、井戸跡2基、土坑3基、ピット2基である。各遺構からは、肥前や瀬戸美濃を中心とする各産地の多様な陶磁器が出土した。近世の戸田は、中山道や「戸田の渡し」、「早瀬の渡し」、「道満の渡し」などの整備によって、陸上・水上の双方において交通の要衝となっていく。本調査で出土した日本各地の陶磁器類についても、人の往来に伴って流通したものであると考えられる。

近世の溝跡5条は、全てが北西—南東方向、あるいは南西—北東方向に走る。大日本帝国参謀本部によって明治13年(1880年)に作成された詳細測量図(『浦和及所澤近傍第二號』)を参照すると、本調査区南側に隣接する現在の“中央通り”の位置には、当時においてもほぼ同位置、同方向に大通りが走っていたことがわかる。今回検出した溝跡の廃棄年代は、出土遺物から18世紀から19世紀中頃と考えられる。溝が使用された当時と明治13年において、この大通りの位置、方向に大きな変化がなかったものと仮定すると、今回の調査で検出した溝跡は、この大通りに平行あるいは直交していたこととなる。これらの溝跡の性格を断定するに足る十分な資料を本調査で得ることは出来なかったが、おそらく調査区南方に所在した大通りを基準とした「地割溝」であった可能性が高いと考える。

結語

今回の発掘調査では、弥生時代後期から古墳時代前期、中世、近世に形成された多様な遺構と遺物を検出することができた。特に、弥生時代後期から古墳時代前期の「周溝持建物」であった可能性がある周溝状遺構や、中世の排水施設であった可能性がある溝跡と井戸跡を検出することができたのは大きな成果である。これらは、それぞれの機能・目的は異なるが、低地という調査区周辺の地形立地に対応するために当時の人々によって形成された生活痕跡であると考えられる。また、近世では、人の往来の増加に伴い、土地の区割りがなされ、生活空間が整備されていったことを示す証拠を得ることができたのは、戸田市域では初めてのことであり重要である。

本調査によって、土地利用の変遷を通史的に辿ることができ、当時の人々の生活の一端を復原することができたのは大きな成果であると考えられる。

引用・参考文献

伊藤和彦

1984『鍛冶谷・新田口遺跡第3次発掘調査概要』戸田市文化財調査報告XV 戸田市教育委員会
岩井聖吾・坂上直嗣・山寄裕子

2013『南原遺跡XI』戸田市文化財調査報告XVIII 戸田市教育委員会

金子宏章

1994「江戸近郊の内耳焙烙について」『江戸在地系土器の研究 II』江戸在地系土器研究会
小島清一

1990『鍛冶谷・新田口遺跡V』戸田市遺跡調査会報告書第2集 戸田市遺跡調査会

1994『鍛冶谷・新田口遺跡VI』戸田市遺跡調査会報告書第4集 戸田市遺跡調査会

2001『鍛冶谷・新田口遺跡VII』戸田市遺跡調査会報告書第8集 戸田市遺跡調査会

2005『鍛冶谷・新田口遺跡VIII』戸田市遺跡調査会報告書第10集 戸田市遺跡調査会

塩野 博

1968『鍛冶谷遺跡第1次発掘調査概報』戸田市文化財調査報告I 戸田市教育委員会

1969『鍛冶谷・新田口遺跡 方形周溝墓群の調査』戸田市文化財調査報告II 戸田市教育委員会

永越信吾

2006「葛飾区域の焙烙 —江戸近郊における焙烙の一樣相—」『江戸在地系土器の研究 VI』
江戸在地系土器研究会

西口正純ほか

1986『鍛冶谷・新田口遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集 財団法人埼玉県埋
蔵文化財調査事業団

早田利宏・河野一也・井博幸

2010『南原遺跡IX』戸田市文化財調査報告XVII 戸田市教育委員会

福田 聖

2014『低地遺跡からみた関東地方における古墳時代への変革』六一書房



1 調査区遠景(南西から)



2 第1号周溝状遺構完掘(北東から)



3 第2・3号周溝状遺構完掘(南西から)



4 第2号周溝状遺構A-A断面(北東から)



5 第2号周溝状遺構遺物出土状況(北西から)



6 第3号周溝状遺構B-B断面(東から)



7 第5号周溝状遺構完掘(北東から)



8 第5号周溝状遺構断面(北東から)



1 第4号周溝状遺構完掘(南西から)



2 第1号溝跡完掘(南東から)



3 第1号土坑完掘(南西から)



4 第8号ピット完掘(西から)



5 第3号溝跡完掘・第2号井戸跡調査終了状況(西から)



6 第3号溝跡完掘・第1号井戸跡調査終了状況(東から)



1 第2号井戸跡・第7号土坑断面(北東から)



2 第5号井戸跡調査終了状況(北西から)



3 第5号溝跡完掘(南西から)



4 第4・5号溝跡A-A'断面(北東から)



5 第4号溝跡A-A'断面(北東から)



6 第4号溝跡遺物出土状況(南から)



7 第5号溝跡8層遺物出土状況(北東から)



8 第7号溝跡完掘(東から)



1 第6号井戸跡調査終了状況(北西から)



2 第6号井戸跡遺物出土状況(北東から)



3 第15号ピット完掘(北から)



4 第17号ピット完掘(北から)



5 第2号周溝状遺構直下A-A'断面(北東から)



第2号周沟状遗构出土遗物



第1号沟迹出土遗物

第4号周沟状遗构出土遗物







第7号土坑出土遗物



第5号满跡出土遺物



第6号满跡出土遺物(1)

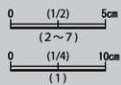


第6号溝跡出土遺物(2)

第4号溝跡出土遺物



第6号井戸跡出土遺物





第23号ピット出土遺物



遺構外出土遺物

0 (1/2) 5cm

報告書抄録

ふりがな	かじや しんでんぐちいせき きゅう まいぞうぶんかざいはくつちようさほうこくしょ											
書名	鍛冶谷・新田口遺跡区 埋蔵文化財発掘調査報告書											
副署名												
シリーズ名	戸田市文化財調査報告											
シリーズ番号	23											
編著者名	岩井聖吾、向井互											
編集機関	戸田市教育委員会											
所在地	〒335-8588 埼玉県戸田市上戸田1-18-1 Ⅱa 048 (441) 1800											
発行年月日	2015 (平成27年) 年 3月31日											
ふりがな	ふ	り	が	な	コ	ー	ド	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地				市町村	遺跡番号		35°	139°	15.1.6		
鍛冶谷・新田口遺跡	戸田市上戸田5丁目20番3				11224	06-001		48°	40°	～	142.5	共同住宅建設
								40°	23°	15.1.29		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項					
鍛冶谷・新田口遺跡	集落跡	弥生時代後期～古墳時代前期	周溝状遺構 5基 溝跡 1条 土坑 1基 ピット 4基		土師器		荒川流域の微高地上でよく検出される周溝状遺構を5基検出した。					
		中世	溝跡 1条 井戸跡 4基 土坑 1基		中世陶器 中国陶磁器 石製品		第3号溝跡及び第2号井戸跡は「排水施設」であった可能性がある。					
		近世	溝跡 5条 井戸跡 2基 土坑 3基 ピット 2基		近世陶磁器 瓦 漆器		溝跡は「地割溝」であった可能性がある。					
要約	<p>本調査地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地である鍛冶谷・新田口遺跡の範囲に属し、JR 埼京線戸田駅から南東に約 800m、戸田公園駅から北西に約 600m の戸田市上戸田 5 丁目 20 番 3 に所在する。</p> <p>今回の発掘調査では、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構 5 基、溝跡 1 条、土坑 1 基、ピット 4 基、中世の溝跡 1 条、井戸跡 4 基、土坑 1 基、近世の溝跡 5 条、井戸跡 2 基、土坑 3 基、ピット 2 基を検出した。</p> <p>調査によって、弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構は「周溝持建物」であった可能性があり、中世の溝跡 1 基、井戸跡 1 基は排水施設であった可能性があることが判明した。また、近世では、人の往來の増加に伴い、土地の区割りがなされ、生活空間が整備されていたことを示す証拠を得ることができた。</p>											

戸田市文化財調査報告 XXIII

鍛冶谷・新田口遺跡区

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行・編集 埼玉県戸田市教育委員会
〒335-8588 埼玉県戸田市上戸田1-18-1
TEL 048(441)1800

印刷 株式会社 東ブリ
〒144-0052 東京都大田区蒲田4-41-11
TEL 03(3732)4155

発行日 平成27年3月31日